



河原田盛美・史料ノート

——大久保政權の「社会的支柱」に寄せて——

鎌 田 永 吉

一

本稿は、主として、維新期から明治十年前後にいたる時期の、政治史への関心にもとづいて作成した、河原田盛美^{もりよし}および河原田に関する史料のノート^{*}覚書である。

その関心は、研究史の現状に即して、より具体的に表現すれば、維新政権のジッポであると同時に明治絶対主義国家の「原型」を作り上げたといわれる、大久保政権の社会的支柱^Ⅱ支持基盤の問題、の一事につきる。

明治絶対主義国家が、その固有の社会的支柱を欠如し

ていたという一つの指摘に注意する場合、そこでいう権力の支配様式におけるイデオロギイ的・政策操縦的要素が、当該社会のいかなる階層を通じて、どのように歴史具体化して行くのか。それは例えば、「政府の人民^Ⅱ政党への超然主義と国民の非政治化^②」が進行するという指摘ともかかわりを持つ問題と思われるが、その場合、非政治化とは、国民の側からは、どの階層によってどのようににとらえられ、進化した事実を指すのか。あるいはまた「国家構成の原理と支配様式における両極的三元論^③」にもとづく「体制的中間層^③」とは、いかなるかたちでみ

ずからを・主体的にそのものとして自己形成していく階層を指しているのか。本稿ではこうした問題に関心を寄せつつ、当面、大久保政権成立の時期における権力Ⅱ支配体制の創出に下から参画して行くであろう階層の歴史具體的な在り方の一つを、幕末の農村社会に求め、その維新後における権力とのかかわり方の一つの姿を追求する。

一方で、「基底からと権力からとの引力の均衡点」に位置していたこれら「明治的な中間層」⁽⁴⁾の、その反体制的側面の分析はたいへんに多い。とくにこの時期に關していえば、大久保政権成立期前後における民衆の蜂起の分析を通して、この時期の支配層内部の対立抗争、それが生み出す、より広い局面における政治的矛盾の本質に迫った佐藤誠朗・井川一良氏の研究は、示唆的である。⁽⁵⁾ここで意図しているものは、こうした階層のそれらへの対極的側面の分析である。

本稿作成のもとなつた史料は、当面、AⅡその大部分を占める、文部省史料館所蔵「祭魚洞文庫旧蔵水産史料」(『史料館所蔵史料目録』第八集所収)と、BⅡ同「陸奥国

南会津郡宮沢村河原田家文書」(同「目録」第十集所収)。

「祭魚洞文庫旧蔵史料」の内)、およびCⅡ河原田の生家である、現福島県南会津郡伊南村宮沢九三八河原田家(現当主河原田盛雄氏)⁽⁶⁾所蔵史料を主とする若干の現地史料である。⁽⁷⁾右のうち、主としてAの史料群によつてわれわれは、明治期の尚古派農政(史)学者として著名な織田完之(一八四二—一九二三)に近い、農政家・官僚としての河原田の相貌を概括的に把握しうるし、Bによつて河原田が明治期に登場して来る歴史的背景の一面をさぐることが可能である。Cは、今のところ、これらを補足的に説明しうる史料群である。

本稿では、先述の関心に即して、これらの史料の整理ノット風に、河原田に関する問題点の予備的な指摘を目指す。このために、末尾に主要な史料を掲げた。

* 後述「履歴」および「碑文」の呼称による。一般には「モリヨシ」と称している。なお同人は、弥藤太・盛征・愛七郎・数衛・久弥・弥六などの異称を時々持つが、本稿では便宜上、盛美と称することにする。

なお、以下文中での「A—1、A—2、……」は前記史料群の種別と整理番号を、「史料(1)、史料(2)、……」は、本稿後掲史料の番号を示す。

二

まず、盛美の経歴を概観する。

このための基本史料は明治三五年十一月作成の「河原田盛美履歴」(A—78—30)なる自筆稿本であるが、該書は、同月二八日付をもって、盛美と同族で現地の郷土史家故河原田徳作氏の編集として、活版印刷で頒布されている。⁽⁸⁾

ここでは、これにもとづいて経歴を摘記するよりも、最も簡潔で要を得た、織田完之の撰銘文(史料(1))を掲げた方がよい。

右書には「東京牛込区払方町九番地 碑文協会」と、関了を示す「完之」の二つの押印が見えている。功德碑が、実際にどこに建立されたかは、目下のところ明らかでない。碑文協会は織田の創立になるものであるが、⁽⁹⁾単

に右の碑文は「四方の請に応じて撰文揮毫せるもの」の一つではない。前出碑文の末尾に、盛美とは「若松県以来之知人」とあるごとく、松本圭堂門下の織田が、国事映掌を名とし、長州藩に入ろうとして慶応三年に岩国で捕えられ、明治二年二月に釈放されて後、同年六月彈正台を経て、一〇月、若松県知事兼城主四条隆平の推挙によって同県榑少属となつて以来、監察局頭取兼主事として教学普及の任に當つて三年七月に病氣退任するまでの期間に交流があつたものであらう。⁽¹⁰⁾ 両者の交流がその後河原田の死にいたるまで続けられたであらうことは、もちろん織田の経歴によってみれば当然であらうし、残存する書信(B—60)や盛美の「東山日誌」⁽¹¹⁾中の多くの記事がこれを裏づける。

盛美は明治四年に出京し、六年十一月までの間、これまでつながらの深かった華族近衛家の家政改革に従事したが、この間に「日本農学捷徑」全三巻の著述や⁽¹²⁾地方制度の考究に従っている(A—78—30による)から、同年一月に大蔵省租税寮出仕となつたのは、あるいは織田の推

挙があったためかもしれない。またさらに、盛美出京の契機の一つも、織田とのつながりにあったのではあるまいか（なお後述）。

ここで、右の二書によって、まったくの便宜的措施として、盛美の活動期間を、次の七期にわけておく。

(一) 天保一三年—明治元年

△誕生時から戊辰戦争期まで▽

(二) 明治二年—六年一〇月

△若松県生産局御用掛・通商掛に取立てられて以後出京、

著述業従事の期間▽

(三) 明治六年一月—一〇年八月

△大蔵省出仕から輿論島支庁長兼警部心得罷免にいたる期間▽

(四) 明治一〇年末—一六年三月

△著述業、物産開発—指導、千葉県出仕を経て農商務省御用掛に任命されるまでの期間▽

(五) 明治一六年三月—三三年十二月

△農商務省出仕となつて以来農務局技手—判任官三等—を

辞任するまでの期間▽

(六) 明治三三年十二月—三六年

△帰郷後、農業経営・産業開発—指導に従事した期間▽

(七) 明治三六年—大正三年八月

△県会議員当選後、死去するまでの期間▽

右のうち、第五期以降は、さしあたり本稿の直接の取扱い範囲から除く。本稿は河原田盛美の年代記を意図したのではないが、この稿の性格上、一応右の時期区分を念頭に置きつつ、若干の問題点に関して史料の検討を試みる。

まず第二期についてとり上げよう。第一期の、幕末期の河原田家および河原田家を中心とする村落社会の動向については、項を改めてふれることにしたい。

はじめに行論上の都合上、ここで父弥七（盛一）の村落における地位をうかがっておく（第1表）。盛美は、文久三年、愛七郎と改名して多々石・朴木両村難村引立名主の役を父に代わって勤める時点から藩の統治機構とのかわりを正式にもち、元治元年家督を継ぎ五人扶持を給

第1表 河原田家名主勤跡書上并御賞方（万延二年同名史料による）

年 月	事 項	備 考
天保 5. 8	名主格被仰付	天保四凶作＝付窮民御手当寸志差上
嘉永 3. 3	上下御用拾被仰付	難民御手当安利調達差上
安政 2.12	御褒美金二分被下	御産物寸志差上
〃	三ツ組盃一箱被下	調達金御請＝付
〃 3. 2	苗字御免被仰付	窮民御手当御備方へ寸志差上
〃 3. 3	御小納戸御上下地御用達被仰付	
〃	多々石村仮名主被仰付	但、文久元年迄六ヶ年相勤
〃 3.11	綿木綿式反被下	調達金差上
〃 5. 2	吸物椀二十人前被下置	〃
〃 5.11	鉄銚子被下置	〃
〃 7. 3	朴木村名主并組頭百姓代兼帯被仰付	
万延元 6	宮沢村等四カ村名主立入被仰付	

される（以下、経歴については、とくに断わらないかぎりA—78—30による）。慶応三年六月に会津藩より「親跡目指揮役申付候条有事節ハ親同様組下ノ者共召連レ御差図次第聊無手継罷出防禦方可取計候事 但右ニ付而ハ親弥七へ相渡置候武器始纏高張等直ニ其方へ相渡置候事」と藩の軍事機構の末端を担う役割を与えられ、同一一月には数衛と改名、小書院御目見仰せつけられ、この間扶持加増もあつて、翌四年正月には御近習一ノ寄合席となつて三月下旬までの間、上野国境檜枝岐村の警備の任についている。この期間以降盛美は会津藩士として警備・偵察・戦闘行動に従事しているわけであるが、この時期の動静は、親弥七の自筆になる「三猿雜記」(B—64)に詳しい。⁽¹²⁾史料(1)にも見えるように、盛美は四月三日に藩の探索内命をうけて上野・下野から江戸に出て閏四月三日に江戸を発し、下総・常陸・下野を経て塩原温泉口から帰藩しており、この報告が若松藩陣中の板倉・小笠原両旧幕閣になされたが、⁽¹³⁾この期間の動静、および同時期に盛美に代わつて末弟末吉が担っていた河原田家の「農業及物産取

扱」、同家を含む在郷商人層の横浜・関東方面の商取引活動の一面も、前記「三猿雜記」で知ることができる(後述)。

つぎに明治二年一〇月一〇日、若松県断獄方に捕縛された盛美は、一五日に放免されて以後一月から、恐らく三年一杯にわたって若松県生産局御用掛・通商掛の任にあるが、この間の活動状況の一斑は、彼の手留と思われる明治三年「雜記」(B-77)で知りうる。⁽¹⁴⁾しかし、恐らくこの期間に勸業・指導の立場から生産局資金貸付に従事していたことを示す史料(2)、およびこの貸借内容を具体的に示す史料(3)が、ともに盛美の生産局辞任―出京の背景の一面を物語るであろう記録として重要である。

史料(2)は、名主(戸長)の手留と思われるものであるが、これによれば盛美は弥六と称していて生産局野尻分局の大元メとして資金貸付業務に従事しており、三年一月の分局の若松合併による貸付金の強制回収が債務農家各戸に激甚の打撃を与えていることがわかる。河原田家の場合、弥六が数口合計四千兩余の貸付を受けているとあるが、史料(3)では、四年末現在、弟末吉名義が二五

〇兩程、久弥名義が二、四〇〇兩程(証文書替による金額か)とある。これだけの史料では真相究明は不可能であるが、その辞職―出京の意味を、維新政府の新しい統治体系の整備過程のなかで、そこから疎外―排出されて行く経営の一つの典型の現われとしてとらえていくことが可能であろう。それは、河原田の転換を暗示している。

四年の出京以降六年十一月の間、盛美は近衛家政改革に従事しながら、著述に従ったようである。

盛美のいわば思想形成の背景については「履歴」で推定できる。経学・国学はもとより、俳諧・和歌・医学・剣術修業は、一六歳から数次にわたる諸国遍歴を通じて鍛えられたものであろうが、思想形成の内面にわたって知ることとは自筆日記が欠如している現在不可能である。但し、のちの、農政官僚・勸業指導者としての盛美の出発点が、「履歴」に「慶応三卯年蚤卯紙ノ改良ヲ計画シ三千余枚ヲ製シテ横浜ニ出シ洋人ニ販売シ大ニ信用ヲ得タリ」とあって幕末期に農業経営に従事していた時期にあったことは勿論であり、その契機が文久元年に宮崎安

貞「農業全書」に接して以来であることを自ら記している。右書には七年の内務省出仕前後から、佐藤信淵家学に傾倒し小野蘭山の本艸学に取組むことが契機になって農政に志したとあり、こうした上京前後における農学への没入の一つの成果が「日本農学捷徑」全三巻の著作になって現われたものであらう。この期間に、前記織田完之との交流が深められていたであらうことは前述した。

ここで後期のものを含めて盛美の著作物を一覽しておく(史料④)。見るとおり(一)その大部分は、内務省および農商務省出仕中に著わした農林水産業関係とくに水産物書(官撰・私撰を含む)であって、(二)紀行・地誌類がこれに次ぎ、(三)とくに内務省致仕後明治一一・一二年ごろに学校用教科書として著述・出版したもの(「明治用文章大全」・「日本地理書字引」など)も含まれている。この期間は、東京に在って学校用教科書出版業を行なっているが、一七年現在の記録(A—78—29)によると八冊の書物の版權を所有しており、うち四冊が自著である。これらの著作物はその全貌が不明でもあり(A・Bともに、数点しか現存

しない)、本稿では盛美の他の著作物や蔵書の検討も含めてその思想史的位置づけを行なうことや、明治期尚古派農(政)学の系統的解明を志すことも、客観的事情から不可能であり、これらについては他日を期さねばならない。

次に、この時期の政治的主張についてみておこう。

ここでもまた当然のことながら、次にのべる史料⑤、(6)の二つの「建言書」も、盛美の思想的系譜をたどりそれとの関連において位置づけることは、この段階では困難であるが、史料に表出している政治的主張の特徴点だけについてふれておきたい。

史料⑤は明治五年八月の建言であるが、このことは「履歴」にも記述がなく、どのような事情のもとでだれに對してなされたものか不明である。ここでの主張の目的は、「国体ヲ確立シ富強ノ方法ヲ立ル事」であり、「富強ノ道」は「百工物産ヲ富殖シ」、「商權商律」を建てることに置かれている。しかるに現在は西洋思潮の無原則な受入れと「頑固ノ徒」の因循姑息による無方向・無秩

序の状態にあって、この「日本ノ通弊」を打破する途はただ「政府ノ政令教官ノ告諭」のみであり、これによつてはじめて「各生活ノ目的ヲ立、其業ヲ営ミ国内ノ物産ヲ富殖セシムル」ことが可能である、というものである。

ここで、主張していることは、いわば上からの政治主導型による物産開発・生業振興なのであるが、次の史料(6)では、かなりニュアンスの異なった指摘をするにいたっている。

この史料(6)は、「履歴」に「六年三月左院ニ衆議院開設ノ件国是確定ノコトヲ建言ス」とあるものを指すと思われる。ここでは、まず現政府の失政として批判し、左院で審議すべき点として挙げるのは次の七点である。

すなわち、(一)国費濫用を招く無原則・無制限な外国文物制度の輸入を行なっていること、(二)豪農商の保護・育成によつて財政強化をはかるべきなのに、工部省が中心になつて官営工業を推進していること、(三)豪農商が担うべき通商の振興を目的に政府大官が外遊し国政を放擲し

ていること、(四)現地情勢をわきまえない開拓使の中央集権的・官僚的運営が行なわれていること、(五)司法権限の一方的な地方分散が行なわれて、各県鎮庄が行なわれ難くなっていること、(六)文部教部の両官が皇国学を普及せず、共和思想の瀰漫を招いていること、(七)大蔵卿が国会計の任務を放擲して外遊していること、以上である。

右に続いて、「国体ノ大道立サルト大蔵ノ会計立タズ」という恐るべき二つの事態を指摘する。「国体」うんぬんについては具体的な展開がないのでここでは後者についてみる。征韓論分裂にいたるこの時期の政争が、基本的に「富国」―ブルジョア化の課題に優先した「強兵」―軍事力創出、階級武装方式という課題をめぐる展開したものであることはすでに指摘されているところであるが、当時その権能の閉止状態に近かつた左院への右建言書で、盛美が「大蔵ノ会計立タサル」事態をついた現状認識や大蔵卿の外遊批判は、井上・渋沢の動きをめぐる留守政府内部の矛盾をかなり適確にとらえたものというべきであらう。

前記の失政七カ条指摘の事実も含めて考えると、この批判の立場は反井上・渋沢の政治的立場に連なつていゝといふべきであらうが、この点はより総体的な判断の材料を待つことにする。

右に関する部分の結論は、「速ニ……會計奇法ノ策ヲ設、然ル中ニ正法ヲ行」なうこと、すなわち国家財政の急激な増大に対する抜本的な方策を樹立すること、それがもたらす破局の事態を回避するために「天下大會議ヲ以テ議會早ク此事ヲ議」することを力説している点にある。ここの部分の真意は充分にはわかりにくい箇所もあるが、意図していることの内容が、当段階の左院の機能充実化の主張であり、その点でこの時期の「国会議院」構想などと同類のものであることの推測が可能であり、かつその国論統一が共和思想の危険性を指摘しつつ、治安強化と表裏の関係で提議されていることを見逃しえない。⁽¹⁹⁾従つて本建言書提出の階級的立場は、前記失政批判(一)・(二)項の指摘と合わせ考えれば、まさに「豪農商」のものであることも明らかであらう。この立場が、次期の

民撰議院設立建白運動等の動向とどうつながり、盛美自身がこの運動をどうとらえていたか、いまは判断の材料がない。

以上が本建言書の現段階での一応の意味づけである。本建言書提出と翌年の内務省出仕との関係の有無を検討することも、今後の仕事である。

三

つぎに第三期にうつる。

左院に建白書を提出したと同じ年の一月に、盛美は大蔵省租税寮十二等出仕となつて、はじめて官界に入り、翌七年一月には、新設の内務省地理寮に配属されて地理課・記録課の仕事をしている。⁽²⁰⁾この期間のまとまつた史料は見当らない。大蔵省から内務省へ所属部局員がそのまま自動的に配転されたものではなく、新設内務省の充実に意欲を傾けた大久保利通の意向によつて「人物……御公撰」がなされたと思われるが、⁽²¹⁾盛美をめぐる具体的事情は不明である。

同年九月、盛美は琉球藩事務取調掛に任命されて以来、九年五月まで一年八カ月にわたって琉球藩事務取扱いの第一線の仕事を担当することになる。周知のように、廃藩置県以降六年段階までは、政府の琉球併合に対する態度は決して積極的なものではなかったのであるが、征韓論分裂以降の急激な政治情勢の変化の中で、大久保派の政治的立場の強化（征韓派に連なる反政府分子『不平士族層を中心とした』の懐柔という意図も含めて）のために、琉球「処分」の問題が一躍政治課題として登場したものと考えてよからう。盛美の右ポストへの着任は、琉球藩事務が内務省所管となった四カ月後である。（この事務取調掛着任後、内務権中録から中録に昇任）。

八カ月後の八年五月、琉球在勤を命ぜられて、七月に琉球に渡り、同一一月には在琉球内務省出張所長心得として現地での第一線行政に当る。以下、本稿では、在勤中およびこの前後については、主として政治史的観点からの史料の説明と問題点の指摘を行なう。

この時期に関する主要な史料は、①「琉球秘録井鬼界

島取調簡条」(A-1712)、②「琉球雜録」(A-1715)、③「琉球在勤書類」(A-1716)である。

これらは、いずれも多数の書類の綴込みであり、のうち最も多いのは、物産取調・開発および博物館や米國博覧会出品に関する調査・統計・報告・往復書類である。このために本島のみならず、先島も含めて島嶼の実地調査も行なった証拠を示す日記・統計資料も断片的ながら残されており、在勤中、盛美がこれらの中に最も関心を持ち、また実際に力を注いだ業務の内容がかなりの程度まで判明するが、本稿ではこれらの史料の全面的な紹介と検討は、紙幅の都合上割愛せざるを得ない。

この時期における明治政府の「琉球処分」に関する基本的経過⁽²⁾、およびこれをめぐる政治上の諸問題⁽³⁾については、すでに明らかにされている部分が少なくないもので、ここでは、単に密偵や治安関係者の観点からの表面的な分析史料ではなく、実務の第一線にいて常時琉球藩当局者と交渉に当たり、或いは産物取立て等のために直接藩内農村の実態をそれなりに掌握していた河原田の関

係史料を紹介し、はじめに設定した視点に限定して若干の検討を加えておく。

盛美は、琉球藩支配層との交渉任務を帯びた内務大丞松田道之・六等出仕伊地知貞馨等とともに七月一〇日に那覇港に着き、ここにあった政府出張所に入っている。

松田等が、日清両属にこたわり、政府の藩制改革や、学問修得者・藩主の上京要求等に言を左右にして応じよう²⁴としない支配層と交渉を続ける間、盛美はその首里城や那覇出張所における交渉の場にも終始同席している。これらの経過については、松田の記録に詳しい。八月二〇日の右の記事に、

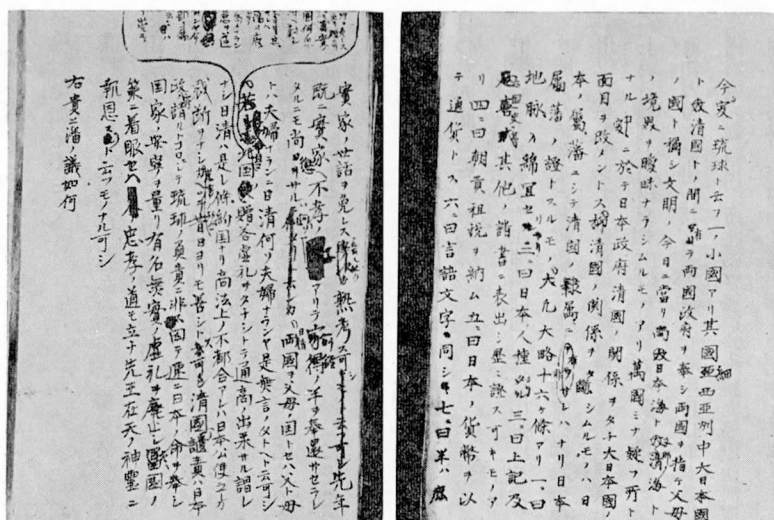
午後二時便方ニ依テ在那覇港内内務省出張所ニ於テ討論内席ヲ開ク乃チ藩吏ニハ摂政伊江王子三司官浦添親方池城親方富川親方^(ツ)トシテ与那原親方幸地親方喜屋武親云上内間親云上親里親雲上等出頭シ内地官吏ニテハ余^(筆者註・松田)并ニ伊地知内務六等出仕及ヒ余之随従官吏中田内務八等出仕種子島内務権大録当出張所在勤官吏福岡内務九等出仕河原田内務中録時任内務十二等出仕等出頭シテ其席ニ着ク(一二六頁)

河原田盛美・史料ノート(録田)

とあり、続いて彼我の「討論交錯」のことを伝えているが、A—Bによると盛美はこの同じ日に松田に宛てて今般御達ノ条件既ニ三十余日ニ至リ今ニ御請ニ不及候処過日幸地親方等へ談話之議モ有之候間拙者存付ノ積ヲ以今明日之内首里ニ至リ談判之末別紙ヲ差出他方便ノ説ヲ加へ見中度此段相伺候也

尚此他出張所ニ於テ□□相見候後も可有之候間此段も御承知並相成度貴官全權之義ニ付御指揮ヲ乞フ

という文書を差出して、進んで琉球藩当局者の説得を買って出ていることがわかる。右文書には松田の承認印も押されているが、右史料に収められている、八月一六・一七日両日付の盛美宛幸地親方書状(二通一原本)に、ともに松田との段階の交渉段取りを「為御心得」、「此段及御報」とあるように、直接松田の命令系統に属しない内務省出張所責任者(所長心得になったのは一月であるが)としての一応の独自の地位と責任にもとづいて説得の任に当たっているのである。松田に伺いを立てたのは、前記『琉球処分』第五号文書(二〇〇頁)にある約定に従



第1図 琉球藩当局者宛て河原田意見書草稿(部分)(A-1712)

つたためであらう。

一〇四

右「別紙」は八月二日付の盛美の口上書を添えて、今帰王子ら五名の藩高官に出されたものである。大筋は『琉球処分』第二冊所収の政府側諸文書と同様であるが、参考のためにその一部を写真に掲げた(第1図)。ここでは、われわれは、着任後間もない、出張所という第一線に勤務する内務官僚としての盛美の積極的行動に注目しておくに止めたい。

こうしたことについては、さらにもう一つの側面も見ておく。

月日の前後関係が不明であるが、このころ「在琉内務省出張公館諸務順序」全一二款(A-1719)を定めて執務体制の整備に当たるとともに、一月三日には出張所長心得河原田盛美の名をもって、大久保内務卿宛てに「琉球藩地出張所地所并ニ建物之義ニ付伺書」(A-1720)を提出して、これまで琉球藩が維持費を負担していた老朽庁舎の官費による新築を建議するなどの意欲を示している。この建議は容れられたものと思われ、のちに新築が

許可されている。⁽²⁶⁾

しかし勿論、課題の最たるものは、「両属」にこだわ
り現実に政府の統一支配に服することを潔しとしない琉球
藩当局の権能を削減し、出先機関としてこれをどう服属
させて行くか、という統治方法確定の問題であつた。こ
れについて盛美は、「内務省出張所ニ於テ裁判上警察上
兼務ノ件」および「藩内人民ノ為メニ着手スベキ件々―
―勸農勸商ノ事」の二章の建議をしている。このうち第
一章のみを史料⑦(A-1716)として掲げた。

盛美が九月一三日付で、出張中の松田・伊地知両官に
建議した趣旨は、「何ヲ以テ権限トナシ何ヲ以テ職務ト
スル」か不明な現状打破の第一歩として「確乎明瞭タル
成規定例」をたてること、つまり「出張所職務権限条定
処務ノ順序等御制定」に着手せよ、ということにある。
現状では藩治は藩主に委任されていてその権限は強大で
あるのに、現実には、例えば裁判等は旧弊・無力による
ために、一部内地人により無法状態があらわれているが
これについて出張所官員は容喙できない。とくに「彼藩

王ハ一等官ニシテ是レ勅任也、参事亦奏任也、之ニ説論
ト云ヒ指揮スルノ権ハ無之」矛盾もある。内務省に裁決
を仰ぐとしても、時間がかかりすぎる。この問題は實際
にどうすればよいのか。また、外船渡来等のときもその
応接権限は外務省にある。要するに出張所は、実権がな
く浮上がつた存在なのである。

こういう、いわば、内政外交の両面における内務省によ
る、現実の統治能力の欠如を強調した盛美の真意の一つ
は、出先機関の強化ということにあつたことは勿論であ
ろう。現実の出張所長心得としての自分の、内務官僚と
しての地位引上を要求した、と見ることも可能であろう
が、右の分析による出張所強化策は、(一)内地人民に関す
る裁判権の付与、(二)出張所官員の警察官兼任、(三)建物の
新設(独立。―前述)、(四)巡回費用の充実、(五)藩内非職士族
の雇傭、(六)地誌・国史編輯取調の内地との同列化、(七)電
信電話の架設、(八)会計規則の制定、等々である。
ところで、右の出張所権限の強化(『明確化』)を実施す
るに当って、盛美の実施過程における態度は、かなり柔

軟性のある現実的なものであることも見逃せない。右史料の前段に注意してみるとそのことがわかる。盛美によれば、もし清国との両属を諦めきれず、内政因循に堕し政府の政令の趣旨を理解しようとし、ない支配層に決定的打撃を与えるとすれば「廢藩置県」以外の方策がないという意見は、「緩急得失ヲ量知セサルノ愚策」である。

現状では、それは政府出費の増大を結果するだけだからである。ここではとりあえず、(一)藩庁・内務省両裁判官による協議、(二)両庁名による布告公布、(三)各地番所への揭示場設置、(四)成規による裁判実施までの両庁適宜処分、(五)両庁による合議尊重、を方針として行くべきだとするこの意見は、先述の松田・伊地知両官への建議の趣旨からかなり後退した妥協的なものというべきであろう。

両官への建議を引用した右史料は、最後尾の記述によってみれば、退任―帰京直後に建議されたもののようであるが、右史料のあとに一葉だけ綴込まれた草稿⁽²³⁾にも、「時勢ト利害ト土地風俗人情等ヲ查考スレハ漸ヲ以テ旧弊改正ス可ク、先ツ藩王代替位迄ハ成丈些細ニ涉ス、条

理名分ニ罹リ差置レ難キ重件ノ外藩知ハ藩王へ御委任ノ処ヲ以テ御据置ノ方可然、……我日本政府ノ版図ノ一ニ販シ且藩治体段相立候上ハ少ク人心ノ居合ヲ見合スシテハ人心服セス」とある。

要するに、ここでは、在勤当初提示した具体策に示された態度は、一年ほどの在勤期間を通じて微妙に変化しており、勢急な同化―権力剥奪を主張する政府部内の一部急進論を「愚策」として退け、人心掌握を前提として、現実的・妥協的な統治方策を提案しているといえよう。

さて、帰京後間もなく出された右意見書において盛美の主張した、内務省出先機関の権限強化案は、ほとんどこの線上で大久保内務卿の認めるところとなって具体化している。先に挙げた庁舎新設・事務機構改革・諸經費の充実はもちろんであるが、内地人民に関する出張所への裁判権付与・警察機構の充実についても、藩内警察権は藩庁、裁判権は出張所、藩民・他府県民との民事刑事事件の出張所扱いなど、藩権力の抑制を厳しくしつつも、全体としてはば建言に沿った配慮を加えて実施されている。

るのである。

すでに述べたように、右の統治体制の整備・強化に関する改革意見は、琉球における産業開発に対する独自の建言といっしょに提出されていた。いまこれを詳細に紹介・検討する余裕はないが、要するにそれは、沖縄における生産性の低さ、商業活動の立遅れの克服を強調したものであり、沖縄の「将来ノ事ヲ按スレハ専ラ勸商勸農ノ事ヲ顧念」する必要があるが、これまでに「調査熟考スルニアジア洲ノ中ノ一大奇島ニシテ物産ヲ繁殖セシムルニ容易ナルモノ数多アリ」、但しその開発は「一時ニ之レヲ着手ス可キヲ欲ス可ラス漸次ニ施行ス可シ其費額ハ藩ノ租八千二百石ノ内ヲ幾分トカ定ム可シ」とする。右の意見は、沖縄の低生産性、立遅れた商業活動の克服を目指して、島内の詳細な産業調査による資料をもとに、いわば政府出資を中心にした官営商業・貿易を進め、民生安定を狙ったものと思われる。このために、彼は在勤中に内務省勸業寮担当者と連絡をとって、信達・上信地方の内地養蚕・製糸の技術導入と、生産―販売計画を

樹立しているし、煙草についても同様である。開墾計画も樹てられていた（前出史料）。右建言書で触れている項目は、これらのほか、石芝・胡椒・陶器・海産物・蔬菜・牧畜・藥草・貝細工・紵等々であり、これらの改良・開発のための官営苗圃設立・内地への留学生派遣の必要性も強調されている。

われわれは、いまこうした産業開発意見書の、結果における影響などを史料的に詳かにすることができないが、ここで指摘できることは、盛美の意見の骨子は、現地産業の政府保護・指導による開発促進が優先すべきであり、それは後進地域沖縄における生産・商業活動の改革による民衆の生活安定と統治政策推進の前提であることが少くとも意図されていることである。それは基本的には、明治政府による上からの産業の近代化の方向に添うものであったものの、同時に薩摩藩（鹿児島県）商人を中心とする内地人の伝統的な収奪商法と対立せざるを得ない面をもつものであることも見逃しえない。こうした現地での行動、それと表裏の関係にある現状認識の特質を見るか

ぎり、盛美が単なる内務省派遣の一事務官僚たりえなかったこと、それはさきの現地統治体制の改革意見と無関係ではなかつたことを、ここでは確認しておくに止めた。そのことが、出張所長心得解任―内地召還とどう関係があるのか、も今後の一応の疑問として残しておく。

内務省那覇出張所長心得を解任された九年五月以降のことについては、以下必要な事実のみに触れておく。

彼は、翌一〇年四月まで内務省庶務局・警保局事務取扱となつて約一年を過ごしたのち、四月一四日、鹿児島県出向となり、六月には興論島支庁長を命ぜられているが、なぜか、四ヵ月後には着任前に兼官（司法省十二等出仕・警部心得）とも罷免されている。この間に、西南戦争の実戦場へも出張していて、つぶさにこの戦争の意味を認識させられたはずであるが、その心情を徴する史料は、西郷の建白書写以外に見当らない。以下第四期以降について、主要な点のみをとりあげておこう。

退任後は、専ら学校用教科書編集・出版事業に当たつたわら、大日本農会・同山林会会員にもなつていて、一

三年には琉球産物拡張のため同地域に赴いたり、薩哈連島水産会社設立準備のため北海道に渡つたりしている、盛美が、いわば実業界に入る、約四年の歳月がある。この民権運動―国会開設請願活動の昂揚期に、かつて意気軒昂たる政府批判の筆を執り、堂々と国会開設『履歴』を主張した盛美が史料的には全くこの政治問題に関心を示している事実が窺えないこと、に注目しておきたい。少なくとも、それは行動面で表われてはこない。琉球処分問題を通じて、行政官僚としてはあるが――というよりむしろ通常の行政官僚としての責務の範囲を越えかねない熱意をもって、積極的に政策の基本方針にわたつて取組んでいた時期が一つの頂点となつて、この前後から、まさに政治からの離脱が始まっていることが看取できる。

たしかに、彼は一四年一月に千葉県七等属を振り出しに、再び官僚の世界に入り始める。一六年には農商務省御用掛兼務も命ぜられ、翌年から農商務省水産課備となつて以来、水産局に拠点を置いて精力的な水産行政と

技術指導に当ること二四年まで七年間、全国各地の踏査、技術指導、共進会・博覧会審査、講演等に寧日措くことのない行動を見せている。この間、幹事として会の運営にも当たっていた大日本水産会にも出向しており、退職を決意した二三年には農商務技手判任官三等に進んでいる。今日残存している水産関係の夥しい著作物・稿本等は、大部分この七年間の活動を背景に作成されたものである。

しかし断わるまでもなく、この過程は、政策への、いわんや政治への関与ではなく、技術官僚あるいは尚古派農学の継承者の一人としての、水産行政に没入して行く過程であることは明らかであろう。

二四年に、末弟末吉死去により老父孝養を名として非職となつて以後、盛美は郷里南会津郡伊南村宮沢の生家に還り、ここに農業者としての道に入ることになった。この後は、自家経営の拡充・発展に従事する⁽³⁰⁾かたわら自村の産業開発、開墾・水利事業の指導・育成に当り、野岩越鉄道敷設・田島銀行経営など地方経済界でも指導的立場に立つし、共進会・博覧会等の審査をはじめとする政

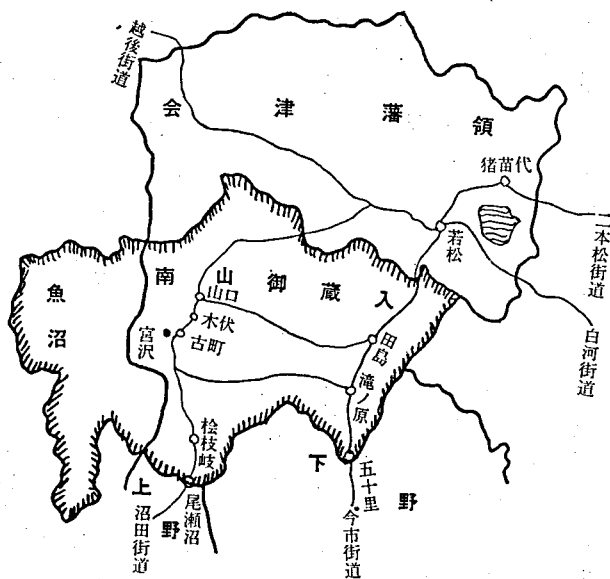
府・地方委員としての全国的な仕事にも前期にひきつづいて活発に参加している。三六年の福島県会議員当選——以後死去の年まで——は、こうした活動の一つの側面として現われて来るものと思われる。

しかし、この時期については主題の対象外になるので、稿を改めなければならない。

四

本項では、第一期すなわち幕末——維新期の宮沢村の社会経済状態および河原田家の経営について概観する。現地史料の発掘調査が不完全な段階で、詳細な検討は不可能なので、盛美が維新期の政治過程に関与して来る背景を考察するための手がかりになる史料を紹介し若干検討することによって、文字どおり概観をするに止める。補訂は後日を期することにした。

南会津郡宮沢村（現南会津郡伊南村宮沢）は、幕府直支配と会津藩預り支配とを交互にうけた南山御蔵入領の



第2図 南山地方略図

うち古町組に属し、近世の村高は本田一三八石〇七四、新田一石二三六、合計一三九石三二三(文久四年)、明治三年の調べでは田五町四畝二四歩、畑一六町三反八畝二一歩の畑勝ちの山村である。前面は伊南川に面し、南方に溯れば檜枝岐を経て尾瀬沼から沼田街道に出て上州に達し、北は伊南川が只見に流れるが、東西は峻嶒な山岳に遮られており、東側が幕府代官所のあった田島に向う山道が作られ、これを経て若松に達する(第2図参照)。

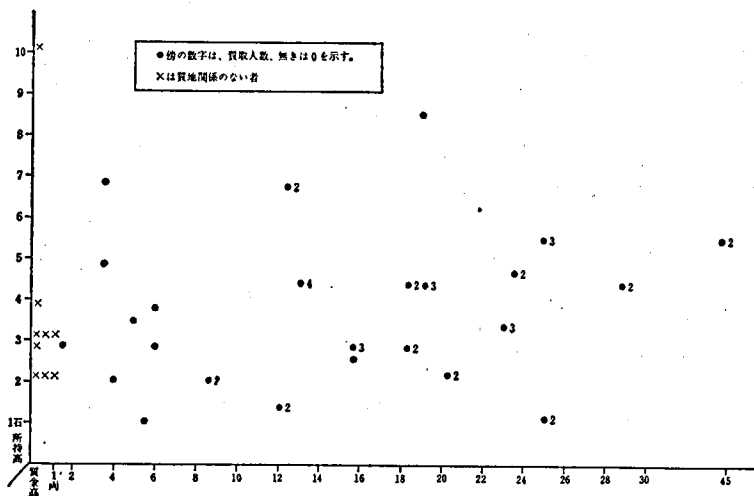
全体当御蔵入之義者地面広しといへとも四方八方大山にして田畑九牛か一毛に相当らず、雪は八月より四月迄山上に不絶、誠ニ辺鄙第一之寒国也、依之男ハ冬々春迄閑東へ出、夫々働きを致し又ハ他国商内等を致すも有、女ハ布織ヲ織リ面々百姓相統致し来り候へバ国産第一之麻布絹糸にて御收納方相励ミ候事故江戸表へひさぎ出候商人無之候而ハ相成不申土地柄(下略)(B—28 文政一三年)

という産業の立地条件は、南山一帯の特長を示すものであった。経済圏は、むしろ若松よりも上下野州から江戸に向かって展開していたのである。こうした立地条件に

規定された農民層分解度の低さが明治以降の福島県内にあってもこの地帯に特異な政治・経済構造を作り出していくことは、すでに指摘されているところである。⁽³¹⁾ 山間地としての特性が飯米の買入米依存のみならず、年貢米からの越年夫食・翌年開作拝借米に頼らざるを得なかったことと年貢石代納制が結び合って、この地域の農民にとって毎年現金獲得が至上の課題となっていたことが、一方で出稼や副業的な商品生産を必然化し、他方、金融手段としての質地の増大を結果する。この二つは、従っていずれも幕藩体制が必然的に作り出す現象であることは詳説の要がない。こうした、体制の生み出す矛盾の現実はこの地域農村の年貢納入状況を一覽しても明らかであり、⁽³²⁾ 宮沢村においても例外ではない(史料⁽⁸⁾)。見る通り、米納高は三斗余に過ぎず、二四貫六百文余の永納であるが、未進累積が多いのが目立つ。

第2表は、明治二年現在の農民持高と質地高^{II}質地金高の關係一覽表であり、これをグラフ化したものが第3図である。持高一〇石二斗五升一合は、河原田弥六(盛美)

河原田盛美・史料ノート(鎌田)



第3図 持高と質地高の關係図

第2表 明治2年宮沢村農民持高井＝質地高（B—42による）

百姓	持高	内 質 地 高(金)	百姓	持高	内 質 地 高(金)
①	石 10.251		②	6.834	{1.079(9.30)→多吉 0.3597(3.00)→弥吉
②	3.778		③	5.395	{4.310(13.12)→ノ ⑤ 0.538(8.20)→喜内 0.538(3.20)→太郎左門
③	3.238		④	4.112	{1.617(15.00)→弥七② 0.538(?)→幸七 0.538(4.20)→多吉
④	石 両 2.876	0.538(1.20)→弥七	⑤	2.158	
⑤	2.876		⑥	6.472	{1.079(?)→延七郎 0.538(?)→十吉 1.079(?)→惣吉
⑥	5.034	0.538(2.30)→弥七	⑦	4.315	{1.079(?)→十吉 3.237(23.32)→弥七③
⑦	2.516	2.157(16.00)→ノ *	⑧	2.877	{1.617(9.00)→ノ 1.260(9.10)→青柳村 太郎左門
⑧	1.079	0.539(4.30)→ノ	⑨	2.158	{1.079(6.00)→弥七 0.538(3.00)→延七郎
⑨	1.238	{2.157(18.30)→ノ ② 1.079(6.10)→延七郎	⑩	2.158	
⑩	2.875	1.6185(6.00)→弥七	⑪	4.315	{2.155(11.10)→弥七③ 1.617(7.00)→青柳村 太郎左門
⑪	3.776	0.539(6.00)→ノ	⑫	3.238	
⑫	3.237	***	⑬	2.696	{0.538 →喜左門 1.079(7.20)→弥七 1.079(8.20)→多吉
⑬	3.595	1.079(5.00)→ノ	⑭	4.315	{0.538(3.00)→弥七 1.079(5.00)→青柳村 太郎左門
⑭	2.158		⑮	1.620	{0.538(3.20)→弥七 1.079(8.20)→多吉
⑮	4.315	{3.434(25.02)→ノ ③ 0.538(4.00)→多吉	⑯	2.158	1.079(4.00)→延七郎
⑯	8.632	4.316(19.00)→弥七②	⑰	2.158	{1.079(13.00)→十吉 1.079(7.30)→弥七
⑰	5.394	{3.237(30.00)→ノ 1.079(15.00)→十吉			
⑱	3.238	{1.617(11.22)→弥七② 1.079(10.00)→太郎 左門 0.538(3.20)→多吉			
⑲	6.834	1.079(3.30)→弥七			

* 外に無跡始末高あり。 ** 無跡始末高・流地高あり。

質地高の欄、同一人内は件数をまとめた。○内が件数、無印は1件。④は無跡再興、⑤・⑥は隠居。

であるが、持高には土地分給策による影響が現われている。グラフでも一見明らかのように、四石～二石台の者が最も多いが、河原田家を除く三四戸（内一は寺）のうち八戸を除いてすべて質地関係（『質地出し人』）をもっており、この石高は村高の半分近くにわたる六二石七四一（三七一両三分）で件数にして六三件、質取人は村内七、村外一、計八人である。このうち弥六の質取分は四一石五三五・二四三兩と群を抜いて大きい。

質地金融関係を河原田家を中心に、安政四年についてみたものが第3表である。断わるまでもなく、本表はこの年までの河原田家と農民の質地金融関係の成立状況の一部分を示すに過ぎないのであって、当年段階の個々の農民との経済関係をそのまま表わしてはいない。しかし、B-70所収「天保四年村中共馬人数計大凡書拔帳」および同年「宗門帳手前高書上写」によれば、農民持高は勿論幕末期（安政―明治二年）と相異しているし、同年質取金高は三九件・二二一兩五分、同一〇年には（B-70所収「宗門帳書上のうしし」）三七件・八〇石三一八・二七六

兩二分二厘であり、安政四年は六三件・一三〇石四五〇・五一一兩と、幕末期にかけて急激な質取件数・石高・金高の増加をみせている。

一方、――ここでは繁雑を避けて数字を示さないが――質取値段は天保四、同一〇、安政四、明治二と年次が降るごとに下がって来ていること、質取総件数と金額の増加は質取人の増加になって現われていること、の二点を指摘できる。

右の事実のみによっても、天保期から幕末維新期にかけて、質地値段が相対的に低下しはじめてはいるものの地主の質地への吸着度は決して減少していないことを確認⁽³⁾しうるが、この、農民を広汎にまきこんでいく質地関係の展開現象のなかで、村内政八、古町村佐野作左衛門のように三〇兩、一五兩というまとまった額の金融が行なわれている事実も見逃せない。河原田家所蔵文書中に、嘉永年間に出された古町村馬場太郎右衛門（後述）名義の金一五〇兩借用証文が残されており、B-35も、熨斗戸組穴原村芳賀八右衛門の、「渡世相続」のための六五兩

二分の借用証文である（元治二年）。後述のように、これらが、商業金融を意味することも推察に難くない。

このことと恐らく関係があると思われるが、安政四年（第3表）と同種史料を文久二年についてみると、質地関係にある一件（一筆）ごとの変化を辿ってもほとんど動きがなく（新規・請返しなし）、文久二年と明治二年では、在来のものに新たに別の土地についての質地関係が発生して来ることに気がつく。これは年貢納入体制を基本として成立して来た在来の質地関係をとりまく条件が変化して来たことを推定させるものである。恐らくここで商品生産の一定度の展開がはじまることが考えられるのではあるまいか。

以上を総合して考えると、貢租収奪体制が必然的に生み出して来る、一般生産者農民との間の質地金融―質地小作関係の展開が、河原田家の経営の主要基盤を形作っているとともに、かくして獲得された貨幣が、周辺農民の副業的商品生産物を買集めて関東市場に販売する在村商人に貸付けられ、在村商人が前貸形態を通じて生産者

を支配し、それが逆に金融主（しばしば商人を兼ねる）の質地小作関係（註33史料）の存続を保証していくという体制が持続的にでき上がっていることが指摘できよう。

幕末―維新时期における河原田家の商業・金融活動については系統的に明らかにしうる史料が少ない。B―40・42・70等によってみると、同家は先述のように持高一〇石二斗余、天保七年、九間×五間の本屋、家族一三人、内男「給取」三人、「雇」二人、「下女」二人の計七人の雇傭労働力が含まれている。安政六年には男女各一名ずつの「質券奉公人」の名が見えるし、明治二年には、檜枝岐・貝原村から計三人の「日雇取」の存在が確認できる。既述のように、同家は安政年間には一三〇石余の質地（金高五一一両）を保有しており、これが経営の重要な基盤をなしていたと思われるが、一方で、早くから烟作物の商品化や農民周辺の副業的商品生産にも深く関与していたことが推定できる。こうした、質地経営と金融商業活動との具体的なかかわりあいの一つの例としては、すでに大沼郡曹組沼平村長嶺家の経営分析の例が知られ

ているが、河原田家の具体的な推移は把握できない。

伊南川各筋農村産出の商品は、文政年間の記録⁽³⁵⁾によれば、麻・紫蔴・晒布・細美・絹糸・狗脊等を取扱う商人が仲間を結成して江戸問屋との取引を行なっており、早くから輸送機構の整備と相俟って商業の発達が見られたようであるが、河原田家が天保―嘉永の株仲間廃止―再興の前後を通じて、こうした商人的機能をどのように果たしたのか全く不明である。但し史料⁽⁹⁾によれば、嘉永三年ごろには、⁽³⁶⁾麻・煙草・紫蔴そのほかの商品を野州蓼沼川岸問屋を通じて、近におよび江戸まで販売する荷主の一人であったことがわかる。

しかし開港前後からは、この地域においても在来の流通統制機構が事実上弛緩し始めており、幕末―維新期にかけては自由な商業活動の方向が確立して来る。こうした動向の一つとして、前記青柳村馬場太郎右衛門の「老のくりこと」が生き生きとした状況を伝えている。⁽³⁷⁾なかんづく、これらの商人層は、慶応期から戊辰内乱の前後にかけて、生糸の買付―領外販売で、莫大な利益を蓄積

していくことが推定できる。『履歴』に

一慶応三卯年、開墾・養蚕・麻布改良ノ方法ヲ計画ス、
一慶応三卯年、蚕卵紙ノ改良ヲ計画シ、三千余枚ヲ製シテ横浜ニ出シ洋人ニ販売シ大ニ信用ヲ得タリ、

とあって盛美もまた慶応期に入って、養蚕で成果を挙げ、種紙横浜直出しに当たったことが明らかである。開港の影響が、南会津の農村にも大きな変動をもたらしつつあったといえよう。

戊辰内乱期における、こうした在郷の商人たちによる横浜への生糸荷輸送、外国商人との直取引の様子の一端は、史料⁽⁴⁰⁾で察知できよう。本史料は盛美の父弥七の自筆になる「三猿雜記」に収められているものであるが、Aの差出人「悻」が、盛美自身か、弟末吉(あるいはそれ以外の人物)なのか、いま明らかでないものの、盛美の探索行動と生糸売込行為が密接な連繋のもとで行なわれたものであることは、B(一四五頁上段)によって明らかである。いずれにしても、探索を続けながら戦火をくぐり抜けて横浜まで生糸荷を運び、さらに中興・新瀉はじめ

各地の戦況と市況を調べながら取引商人と共に商売に従事している(B)、南会津生糸商人の動向の一端が明らかであろう。文中Aの上野屋金七は横浜の生糸売込商として知られているが、³³⁾他の各地商人の調査・分析は紙幅の関係もあり他日を期していまは史料の紹介に限定する。

ここでは、さきの青柳村馬場氏の場合と同様に、横浜への生糸売込商としての積極的な行動様式を通じて、河原田家の経営の新しい側面に意を払いつつ、このような国内市場への新しい参加の様式が盛美の「政治」行動をどう支え、論理付けるものとなっていたのか、を検討する素材としてこれらの史料を考えておきたい。

さらに、盛美にとって——同時に盛美を生んだ南会津の農村社会にとって——、維新とは何であったのか、なかんづく先述の第二期において盛美が客観的に与えられ、克服することを余儀なくされた政治的課題は何であったのか、を考えていくためには、戦乱終結直後に発生した世直し一揆——伊南三千石騒動を見過ごしえないで

あろう。この一揆は、一月二日に古町村と川向うの宮沢村が発端の中心になって起こっており、古町組惣代山口村善之助はじめ一二ヶ村名主が六〇〇人余の農民の攻撃にたえかねて、諸帳簿破棄・質物返却・利足値下・諸賦課軽減・諸産物商売の自由など一〇カ条の要求を受け入れさせられた事件であった。一カ月後に、一揆は「内済」による妥協的な解決を結果したが、この年から二年にかけて会津藩領を含む近在農村一帯に、一揆——こわしがほうはいとして拡がり、騒然たる様相が現出したことは周知のところである。³⁹⁾

このいわば「無政府状態」⁴⁰⁾を盛美がどう迎え、どう克服して行こうとしたのか、この後、若松断獄方に捕縛されるまでの一年間の記録が皆無な現在、軽々しく憶測することができないが、農民が掲げた闘争目標が、まさに河原田家の経営基盤そのものを真向から否認するものであった事実、しかも一揆発生を中心地が古町村とともに足もとの宮沢村に置かれていた事実は、きわめて示唆的なものを持つものである。今後この点も、新しい検討の

手がかりの一つとして行きたい。

五

明治五年から六年にかけて発生した廃藩置県以後の国内情勢の混乱と、これに触発されて激化する支配層内部の対立抗争——政治的矛盾の進行のなかで、河原田は「国会」開設要求の建議をするに至った。そこでの真意は、社会的・政治的混乱を権力の集中化による治安の強化によって収拾し、これによって人民による政治——台頭しつつある「共和」思想の危険性を排除して「国論」の統一化をはかることにあった。そして「国体を確立シ富強ノ方法ヲ立ル」という現下の枢要課題を解決する「道ハ全国ノ人民勉メテ百工物産ヲ富殖シ商權我ニ在テ我國ノ財ヲ出サス、他国財ヲ入ル、」ことにあり、この課題を担う「豪商富農」を前面に押立てて、「各省各県」・「上下」協力して「財本」を確立し「會計奇法ノ策」を樹てゐるために「天下大会議」を開くべきことを要求する。

この時期の河原田の階級的立場は、従つて「豪農富商」

のそれにあったと言つてよからう。そうした主張の歴史的背景を求めるとすれば、幕末——維新时期における前期的資本としての在り方と、それが生み出した一定の矛盾の表現である世直し一揆への厳しい認識があつたと思われる。これらの点について、なお実証を深め論理的に整合させて行くことが必要であらう。

次に、こうした階級的な立場に立脚して彼なりに追求した自らの政治指向は、権力——当面の成立したばかりの大久保政権の内部に行政官僚として入りこむことによつて実践に移されて行くのであるが、その行動は常に（尚古派）農学徒としての農林水産学の検証・普及と表裏一体をなしていた点で、いわばその経世済民的な思考・行動様式が生産諸条件の改革——現実の生産者の保護・育成を第一義とする行政の立場を、本質的に持ち続けている。この立場に拠つた現実的な、しかしその故に極めて積極的な行政上の改革意見は、通常の行政官僚の業務執行の態度からのみでは発現しにくい性質のものといえよう。まさにそのことの故に、大久保政権のもとで整備

され、定着しつつあった官僚機構の中で、末端行政を担う盛美の実務——農林水産行政における技術指導者としての転進、いや定着が始まったのだと思われる。この過程を「脱政治化」と表現したのは、表現の当否は措くとしても、そのような意味を持っている。

「国内安寧保護ノ事務ヲ管理スル」ことと「全国人民ノ安寧ヲ計リ戸籍人口ノ調査、人民産業ノ奨励、地方ノ警備」（「内務省職制及事務章程」という、警察権と殖産興業推進の二大権を「管轄」する内務省の重要な柱の一つは、まさにこのようなかたちの内務官僚によって支えられ、行政が担われていくことの一つの形を本稿では示した。内務・農商務両省の行政官僚を退いた後にあっても、自ら農業経営者としての実践の道にありながら、その産業開発・技術指導が、政府、府県中心の「農村救済的」な立場で推進され、殖産興業政策（博覧会・共進会・品評会等への重用）と一体化されたかたちで進められていく事実には、本稿での関心の一つが注がれている。従ってまた、明治中後期においてうち続く日本農村の窮乏化、分

解の激化のなかで、この立場において盛美がどのようにこの危機をとらえ農村救済に身を挺するかということも本稿によって引出された実証上の課題であろう。⁽⁴⁾ ここでも県会議員としての盛美の活動の分析が残されている。

註

(1) 長井秀夫『天皇制国家の成立』（一九七〇 東大出版会刊『講座日本史』5所収 第四節）。

(2) 松本三之介『天皇制国家と政治思想』（一九六九 未来社刊）の指摘。

(3) 藤田省三『天皇制国家の支配原理』（一九六六 未来社刊）。

(4) 色川大吉『明治の文化』（一九七〇 岩波書店刊『日本歴史叢書』）。

(5) 「天狗騒動とワッパ一揆」（歴史学研究三五二号）。

(6) 盛雄氏は盛美の実長子。伊南村会議員などを経て福島県会議員となり県会議長も勤められた。河原田稼吉（一八八六—一九五五。一九三七年林内閣内務大臣、貴族院議員、三九年阿部内閣文部大臣、翌年大政翼賛会総務、戦後衆議院議員、自由党総務）は、盛雄氏の姉五十子氏の夫で盛美の養子。

(7) 以下本稿では史料引用のさい、A・B・Cで略記し、必

要に應じてA・Bについては『目録』の整理番号を付して典拠を示す。九五頁補註参照。

(8) 伊南村教育委員会のご教示による。

(9) 織田雄次『鷹洲織田完之翁小伝』(一九二九) 四二頁。

(10) 同右二五〜二六頁。

(11) 河原田盛雄氏蔵。三十九年から四三年まで五冊、第一巻冒頭に左の記事がある。

「余十三ヨリ日記ハ怠ラサリキ。然ルニ明治卅七年十二月四日ノ類焼ニ四、五年残スノ外悉ク焼失セリ。而シテ三十八年ハ洋本綴ノ売本ヲ買求テ記シアリシカ本年ヨリ半紙綴ニ改メ予カ号ノ東山ヲ以テ日誌ノ題トセリ」。

焼失を免かれたという日記は、未発見である。なお右の日記は、明治期の農業経営日誌としても、地域の産業開発・政治活動(県会)の事情を示す記録としても有用である。

(12) 美濃版大全四冊。慶応四年年間雜記。河原田家には同名の書が二冊(四年五月・八月)が所蔵されており、八月のものには④の数字がある。全七冊以上あったと思われるが全貌は不明。なお、同家所蔵「明治三十二年訂正一名伊南文庫 河原田文庫目録 河原田盛美」(一冊。なお後述)なる冊子の、「蔵書書目従著撰村所存分」の部には「河原田盛一翁日記三十拾冊、同雜記五〇冊」が見えるが、これは三十七年火災で焼失したふしがあるので、本史料とは別のものか。

戦争当時、生糸商売のために関東一帯・江戸に進出して

いた古町村の馬場太郎右衛門も、商用の帰途、松枝岐村辺で農兵を組織している。(同人の回想記『老のくりこと』による)馬場と河原田家との関係については後述。右書一三頁には、「今の盛美様などは此頃は河原田主計様とおっしゃって立派のお武家様で御座いました」とある。

(13) 両田幕閣を中心とした旧幕・会津方のこの時期の動向については拙稿「奥羽同盟と会津藩」(『会津若松史』5所収) 参照。

(14) 参考までに同史料所掲の若松県管内物産輸出入高を掲げ

他邦買入品		他邦輸出品	
漆	6,600	人	20,000
菜	4,800	参	1,200
茶	5,000	菜	5,000
操	20,000	糸	100,000
繰	60,200	管	10,000
銃	3,900	芋	7,000
銃	28,200	味	2,000
砂	50,000	器	50,000
具	100,000	漆	3,000
船	30,000	地	30,000
太	1,085	伊	5,000
小	200	北	2,000
竹	20,000	五	5,000
下	40,000	油	10,000
紙	20,000	紙	7,000
塩	5,000	藍	2,000
古	3,500	材	10,000
蚕	3,000	出	7,000
牛		銅	2,000
湯		工	10,000
		戸	
合 計	401,485	合 計	279,760

差引 121,752兩不足

る。なお『会津若松史』6の六四―六七頁所出の各表や、

總理府所管「公文録」各県の部四の十七掲載の五年十一月現在の「若松県物産表」などの資料との比較検討が必要である。

(15) 河原田家では「東山日誌」以外に盛美の内面を徴すべき史料は見当たらない。註(12)所引「目録」に「河原田東山明治五七七八九十備忘録」一冊「回国日誌」(元治元年)一冊の名が見えるが実在しない。なお同家には「目録」のほかに、「再再河原田文庫目録」があり、(ともに自筆)その中扉に「大正三年十一月改、七千六百八十二巻ノ蔵書アリ、類焼ノ本老万千貳百七十三巻ノ残本ト土蔵ニテ不焼モアリ、未調目録ノモノト統テ□□亦買ルモノト日々増加セルアリ、忽チ老万巻ニ復古センカ、但写本ニシテ無ニナキモノヤ稀ナルモノハ再ヒ得難キライカンセン」とあつて、加茂真淵「古今集打聴二十巻、同講義二巻」等の貴観本と思われる和書数十巻(冊)の名を挙げてゐる。前記「目録」では内容が「蔵書目録従来官沢所有分」、「明治廿四年四月四日調査(廿五年六月改メ)東京之部蔵書目録」、「蔵書目録(明治廿四年東京ヨリ持来分)」、および明治廿五年以後ノ所有分の四部にわけられて書名が挙げられており、皇典国史以下五〇前後の分類項目を掲げて(後者「目録」も項目あり)、「三十六年四月、八千百廿六巻」とある。これらによつてみれば、若干の地方史料を含めて、大体一万冊を超える書物が

常時所蔵されていた模様である。

(16) 本建白が明治五年七月二五日制定の「集議院建白規則」(『明治政史』―『明治文化全集』第二巻所収)一六四―五頁の手続に従つて、どのように提出され、採上げられたかいま確認できない。

(17) 大江志乃夫「日本の産業革命」(一九六八 岩波書店刊)序章参照。

(18) 大江「大久保政權下の殖産興業政策成立の政治過程」(『明治国家成立の経済基盤』―一九六六 お茶の水書房刊)三八二頁以下。

(19) 「国会議院」構想については、宮島誠一郎「国憲編纂起源」(『明治文化全集』第一巻所収)三四七頁。ここでの「議員」は「第一農工商ノ財産アリテ文字通シ事務ノ論モ相応出来スル者 第二右ノ見込ノナキ時ハ寧ロ財産ニ乏シクトモ文字ニ通シ事務ノ論相応ニ出来スル者」である。

盛美のこの段階での権力主義的発想と無関係でないのは、B―109所収の左院二等議員高崎五六の「県庁管轄予備兵ヲ置カン事ヲ議ス」という議案書下書に、恐らく盛美が失書補訂を加えている事実である。右書は、B―109に綴られている三月四日(六年カ)付河原田宛高崎書状(原本)と密接な関係を持つものと思われる。

(20) 「官員録」では、盛美は東京出身となつてゐる。この時期の明治政府官員の東京出身者の過大な数字(石塚裕道

「大久保政権の成立と構造——殖産興業政策展開の政治的前提について」(二四頁)は、勿論若干の再検討の要がある。

- (21) 史籍協会『大久保利通文書』第五、巻二十六、二七三、二七四頁、明治七年正月二日吉田清成宛書簡。なお二九〇頁にもある。

- (22) 松田道之『琉球処分』(風間書房刊『明治文化資料叢書』第四卷)、『沖繩県史』12所収「総理府官房総務課所蔵史料」のほか『大久保利通文書』第六、『岩倉公実紀』下等参照。

- (23) さし当り井上清『沖繩』(岩波講座『日本歴史』近代3所収)、金城正篤・西里喜行『沖繩歴史』研究の現状と問題』(歴史学研究三五七)等参照。

- (24) 前出『琉球処分』第二冊。

- (25) 「履歴」には出張所長心得任命が一月三日とあるが、この相違の理由は不明である。

- (26) 『沖繩県史』12、一五七〜一五八・一六八〜一七〇頁。

- (27) 松田出発は『琉球処分』によれば一日であるが、この日付のくいちがいの意味はいま不明である。

- (28) 「盛美在勤ノ命ヲ奉シ去歲七月当琉球藩ニ赴任ス、而既ニ、一年一月」とあるから九年五月以降であるし、「御決定ノ上御下命有之度」とあるものの帰京後も当座は琉球事務を執っているので提出は帰京後かと思われる。これが、史料(7)の前文に当るのか、「藩情及土地風俗慣習等曾テ実際

目撃スル所ノ大略ヲ上申」した別のものがあつたのかいまは不明。

- (29) 『沖繩県史』12、一八二〜一八四・一八七〜一九二頁その他。

- (30) 三九年「東山日誌」第一巻の末尾に、次のメモがある。

三九年貸田 二町一反四一四

四反四〇一

松原新田一町七反三〇六

三八年マデ手作物分六反五二六

可起分 六反三〇〇

宮沢計 五町六反六一三

他ニ古町田一町六反九一七・小田 六反八二五・館岩

八〇〇・四〇〇年六月改九町四反五畝十歩

- (31) 大石嘉一郎『日本地方財政行政史序説』九三・九四頁。明治一六年現在一五郡中、自作地率は九一%で最高、また地

- 租五円未満納入者は九〇%で最高、五円以上納入者が一〇%で最低(極端に低い)を示している。南会津一帯は、概して立憲帝政党の基盤であつた。伊南村でも、三方道路建設問題を中心とする反三島通庸運動には、一時、勸説に呼応して加担しかけるが、すぐに離脱する。(史料(2)「手留」)。

- (33) 天保期の宮沢家の質地小作証文を例として掲げておく。
地元借用小作証文之事(B-139)

(32) 古町組村々年貢納入状況 (文化十二年十二月「去戌御取箇米永請取勘定目録」より作成)

	大 桃 村	大 原 村	大 石 村	小 笠 石 村	耻 風 村	落 合 村	浜 野 村	
役	78.984	58.962	76.806	76.806	26.109	46.189	111.284	村小
三	2.000	1.530	2.030	2.030	0.680	1.200	2.900	小
本	14.3685	9.1460	12.5661	12.5661	3.0920	5.4335	永 19.2966	途
西	.4132	.2668	.3602	.3602	.0883	.1549	55.44	途
社	.1305	.0375			.1325	.1306	4274	口
同	.3596	.3306				.1659	4585	脚
断							4760	眼
内							8366	眼
六							5573	主
ケ							5200	分
村							4.1466	文
目							1.1845	文
元							2.990	代
名							1.200	斗
主							7.5306	(斗)
分								(石)
文								(斗)
御								(石)
納								(斗)

・其の他共。村高は『福島県史』10 (下) 790頁による。

字はたにて御高入新
田老ヶ所田十老枚

入小屋村借主

太左衛門⑩

天保九戌九月

親類受入太郎兵衛⑩

五人組受人平 八⑩

右同断 善兵衛⑩

宮沢村

弥七殿

(34) 『会津若松史』第五卷、六九頁ほか。

(35) B-28 「文政十三年商人仲ヶ間議定書写し」。この時の

商人惣代として慰斗戸組湯岐村星覚之丞・古町組白沢村羽

染惣六・同青柳村馬場太郎右衛門・和泉田組築取村恵七・

人引受弁済いたし地元受人方へ引取出作可仕候、右之通相
極候上者譬手余り候共如何様之雪年有之候共貴殿へ御苦勞
損毛不相懸加印中ニ而無滯作人相立小作少も相違仕間敷
候、為後日請人加印証文仍而如件

同和泉田村弥左治・黒谷組只見村吉左衛門・大塩組大塩村長兵衛・金山谷組北中津川善右衛門の八人の名が見える。

(36) 河原田家が藩の御小納戸御上下地御用取扱方に任命されているのは、このことと関係があるか。

(37) 太郎右衛門(天保六―明治四一)は養子として入って間もない安政三年、白岩村の金山万(家号)から葉煙草一二〇俵を買入れ下総川島河岸池端藤蔵に販売して以来、紫蔭・まゆ・麻布の江戸出し、利幅の大きい太物仕入れに当るが、明治以降の資産構築の基礎は、同書によれば慶応期から着手し戊辰内乱期の前後に集中的に取扱った生糸の販売利益である。この短期間に、伊南地方―喜多方・若松・福島・下野三依・桐生と奔走し、移動することに莫大な利益を挙げている。同人は、明治期に入って横浜への生糸販売に乗出し、上州から技術者を呼んで揚返場を建て、技術改良にも尽すとともに、生糸委託販売のための柳馬会社を作って社長となったり、須賀川銀行、田島銀行の経営・処理にも当るなど明治期の経済界の指導者の一人となった。

〔史料〕

* 以下所掲史料の表題は、適宜付したのものもある。

(1) 河原田盛美翁功德碑銘(半一冊)(A―31)

翁通称盛美号東三山、藤姓河原田氏、岩代国南会津郡伊

(38) 『横浜市史』第二巻、付表五頁。同家は安政六年開業、呉服太物・糸類・砂糖・米・雑穀・小間物等を商う、とある。

(39) 『福島県史』資料10上、一、二〇〇―二二〇五頁に一件史料収録。庄司吉之助『世直し―一探の研究』(一九七〇校倉書房)ですぐれた分析が加えられている。

(40) 上州からの商用の帰途、山口村でこの一揆勢に遭遇した馬場太郎右衛門は、農民の借金棒引き要求を仲間と相談して認め、後、民政局のはからいで元にもどしたが、和泉田組の資金のみは半額返済免除としたという。前掲書二四―二五頁に「今のお若い方にハ夢にもこんな事は御合点が参りますまいが、丸で此頃は無政府なんですから今から見ますとお咄に成った訳のものでは御座いませぬ」とある。

(41) 藤田、前掲書。天皇制において体制的危機が叫ばれるときにきまって「地方問題」がそしてそでの人民統治の中心問題がつねに「人」の問題としてあらわれる、という指摘を想起せよ。

南村字宮沢ノ人、世々為郷ノ望族ニ考テ曰ニ弥七盛一、姓渡部氏、翁以天保十三年壬寅十一月生、幼名弥藤太、嘉永四年、甫十歳、就赤松真和、習字読書、安政元年、十三歳、就三星元禎、読小学四書五経文選左氏伝、習俳

歌於四季歌垣、十六歲、得父許、出郷里、自東海道、詣伊勢太廟、婦江戸、寓永山道川ノ宅、學經書及醫書、又習弓馬刀槍、漫遊與羽越後、上白湯山月山飯豐山、玆歲誦古事記伝、有感古學、多集國學書、文久元年、歲二十入原勝馬門、學太子流劍道、入野矢常方、門學和歌、誦宮崎安貞ノ農業全書、大用心農事、歲廿三、以藩命、襲父職、從難村引立事、元治元年、至伊勢、入荒木田守宣門、學神道祓式等、經紀伊伊勢大和摂津四國、出山陽道、入京都、巡中仙道、歸郷、会津藩特賜五口、許謁見、慶応元年、為西洋砲備付、獸金、賜上下地、越三年補指揮役、率組下、備武器纏高張、以供緩急、在家從事開墾養蚕麻布改良等、製蚕連三千枚出、横浜洋人喜買之、四年及三國難、起、受命守上野國境檜枝岐村、累旬、以藩內命、出上野、入江戸、居數日、經下総常陸下野、自塩原温泉間道、歸藩、謁藩主及板倉周防守小笠原宥岐守、報告事情、即班寄合ノ上席、明治二年、受若松縣斷獄方紀問、既解、補若松縣生產局御用掛并通商掛、四年從事

近衛家家政改革、鞠躬尽瘁、殆亘三年、著農學捷徑、研究地方凡例錄、講地方制度、六年補租稅寮十二等出仕、尋轉地理寮十二等出仕、崇信佐藤信淵先生之農政學、集遺著、任内務中録、掌琉球藩事務、輪出夜光貝殼於米國、是為始也、承琉球在勤内務省出張所長心得之命、採集沖繩地方庶物、著琉球物産誌、木梨少丞著流引繼事務、歸京、兼勤庶務局警保局事務、以職務勉勵、賜金六十円、十年為鹿兒島縣御用掛、先赴川路大警視ノ陣、視察開戰實地、又出張桜島、任鹿兒島縣六等屬、以職務勉勵、賜金若干、為輿論島支庁長、兼司法省出仕及警部心得、賜慰勞金、依願免官歸京、愛小学教科書高価、特以廉価、供用府県、三年、再赴琉球、謀南島產物擴張、十四年、謀薩哈連島水產業、巡歴北海道、任千葉縣七等屬、入農商課、為水產集談會委員、十五年為大日本水產會會員、十六年、兼農商務省御用掛、辭千葉縣官、就田中芳男、專從水產事、羅集古今書、著錫志七冊、圖一覽、昆布志等、校訂畔田伴存水族志、水產博覽會賞、事務勉勵、賜金、大日

本水産会専任庶務、或為水産共進会事務員、又命水産局勤務、為佐賀県外七県聯合共進会錫審查官、派遣、十八年任農商務七等屬、為水産局員、囑水産共進会委員、或為大日本水産會議員、每水産共進会、任審查官、廿年為水産巡回教師、派石川県、又派鳥取島根大分靜岡諸県、或派大阪府兵庫青森福島県、為第三回水産博覽会審查官、廿三年、辭職歸郷侍養老父、移植但馬杞柳、營別業於館岩湯花温泉場、名清涼館、伊南迎洋医、開業、或移殖鰻魚、廿五年、移植吉野杉檜種、實施稻作改良法、以自費、開設農產品評会、以大日本農会会頭之命、担任審查長事務、廿六年、推為野岩越鉄道創立委員長、官沢区開用水堰八百余間、大起灌漑之便、從來無竹、始移之、廿八年第四内国勸業博覽会、命審查官、派京都、拜謁天皇陛下、後以審查勳勵、賜銀牌及銀盃、廿九年為田島銀行取締役、三十年、伊南川勝地建別邸、名明輝樓、作圖書館、又館岩地内道路橋梁架設費中獻金賜盃、為所得稅調查員、第二回水産博覽会為審查官、又為大日本塩業協會特別会

員、受大日本水産会綠色有功章、第二回水産博覽会以事務勳勵、賜金百円及銀牌、伊南川治水工事尽力竣成、明治廿五年以來八年間、移植吉野杉檜苗於山中、数万、移植桑樹、七年間、卅三年、第五回内国勸業博覽会、為審查官、賜銀盃并金、同年福島県特賞勸業獎勵之功、賜銀盃、卅六年福島県會議員當選、為副議長、四十年奥羽六県聯合共進会推為名譽會員、南会津郡駒止嶺改修道路、其功不尠、郡会贈感謝狀并金時計、四十二年、憂香取神社衰退、刻苦經營、廣森林、附田地、修社殿、進社格、補社司、曾好著述、官選私選凡上六十余種、此歲県會議中卒倒、為半身不隨、尚養病、瘳公共事業、大正三年八月十五日、宿痼再發終逝、年七十三、葬先塋之域、男盛雄承嗣、今茲親戚故旧胥謀建碑、請銘于余、余若松県以來之知人也、乃叙事作銘曰、夙志在經世濟民、海山諸島普諮詢、竭心水産、最超倫、著述報國公論伸、辭職返家養老親、県会選長議經綸、灌漑築堰投錢絹、運輸謀便繕路新

會通_二古学_一崇_二產神_一 増進社格_二致_二豐禪_一
開物成務潤_二郷鄰_一 厚德令譽起_二後人_一
大正六年九月

鷹洲逸人七十六翁綴田完之撰并書

(2) 手留 (伊南村教育委員會保管 横半一冊)

明治已十二月金山谷野尻村分局生産局長

權大属 藤本昇様

大元_ノ 河原田弥六

後々 小属平賀平様

右者生産引立として資本諸方へ御借渡ニ相成候所、

同午十一月迄若松本局合併ニ相成候迎俄ニ御引立貸

金厳促ニ相成金借候者大キニ難渋致潰立候者も多く

只見菅家清一郎杯逃亡留守身代限りニ而不足ハ支配

弁納等ニ相成二三年過罷帰候事

一宮沢弥六者口々ニ而四千兩余借金有之候得共其儘若松

引取近衛公之東京へ行戸籍等迄東京へ送り追々出世被

致候事、跡ニ而親弥七は借金ニ方ニ而折々若松欲願ニ

罷登大骨折察申候

河原田盛美・史料ノート (鎌田)

(3) 生産局資金拝借証文 (B-37・38)

(1) 奉拝借年賦証文之事

一金貳百四拾八兩ト

但生糸売捌

永百五十六文九分

損金無利五ヶ年賦

但

金四拾八兩ト永百五十六文九分

申十一月期

金五拾兩也

酉十一月期

金五拾兩也

戌十一月期

金五拾兩也

亥十一月期

金五拾兩也

子十一月期

右者以 御勘弁無利五ヶ年賦被成下難有仕合ニ奉存候、

依而者年割当之通年々十一月聊無遲滞御上納可仕候、為

後日之連印証文依而如件

明治四年辛未十二月

第四十二區
宮沢村借主

河原田 末吉[㊤]

親類請 小山延七郎[㊤]

同断 河原田 八郎平[㊤]

同 断 同 多六[㊦]

同 断 大宅 幸七[㊦]

同 断 五十嵐 富次[㊦]

生産御役所

前書之相違無御座候、以上

古町組大肝煎高場治一郎代

野尻組大肝煎

渡辺源三郎[㊦]

(㊦)拝借金証文之事

一金千両也 但申正月元同八月期元济利足金ノ拾八両

ニ付毫分利付

右者此度生糸前金ニ奉拝借候所実正ニ御座候、御返納之義者期日迄ニ生糸買調時相場ヲ以元利丈ヶ屹度上納可仕候、万一滞候ハ、親類一統ニ而引受弁納可仕候、為後証文立入加印証文依而如件

第四十二区宮沢村借主

(明治三年申正月)
明治四年未十二月

河原田久弥[㊦]
引請人大塩村

五十嵐 富次郎[㊦]

親類立入

小山延七郎[㊦]

同断 河原田 八郎平[㊦]

同断 同 多六[㊦]

若松県

生産局御役所

(㊦)奉拝借金子証文之事

一金貳千三百三拾両也 但申正月元同五月期

拾八両ニ付毫分利付

右者此度御返納可仕管之処只今一時ニハ上納相及兼申候ニ付無勘深々御願申上当申ノ五月中迄御貸居奉願上候所実正ニ御座候、然ル上者期月迄ニ元利急度御上納可仕候、万一滞候ハ、親類一統ニ而弁納可仕候、為後日之立入加印証文依而如件

第四十二区宮沢村借主

(明治五年未十二月)
明治五年未十二月

河原田久弥[㊦]
引請人大塩村

五十嵐 富次郎 ㊦

親類立入 小山延七郎 ㊦

同 断 河原田 八郎平 ㊦

同 断 同 苗 多 六 ㊦

同 断 大 宅 幸 七 ㊦

生産局

立入 西方村 二 瓶 文 吉 ㊦

御役所

(4) 官撰及自著ノ書 (A—78・30。明治三二年現在)

一、日本農学捷徑 三冊

一、明治用文章大全 一冊

一、日本地理書字引 一冊

一、沖繩志略字引 一冊

一、沖繩語解 (未刊行) 一冊

一、錫図解一覽 老枚

一、昆布図解一覽 (未刊行) 老枚

一、錫志 (同上) 九冊

一、水産淵海 (同上) 五拾八冊

一、日本水産製品製 四拾冊

一、清国輸出水産製品誌 (奉職中ノ撰) 一冊

一、京都、岩手、愛知、大分、佐賀、兵庫、青

森等水産教授記 (奉職中ノ撰) (未刊行) 八冊

一、四木小記 (同上) 一冊

一、山林考案 (同上) 一冊

一、養蚕実記 (同上) 一冊

一、神宮参拝記 一冊

一、度神宮参拝記 一冊

一、琉球紀行摘要 一冊

一、東山琉球紀行 三冊

一、上野、下野、漫遊記 一冊

一、日本水産製品分類表 一枚

一、碑銘集 一冊

一、寿留女志 五冊

一、水産共進会報告水産講話会記事并列品改説 一冊

一、伊南名勝誌 一冊

一、温泉集 一冊

一、湯ノ花温泉誌 一冊

一、鉦山誌	一冊	一、漁家永統法	一冊
一、漢口水産製品図解(官職中ノ撰)	一冊	一、食物改良説(同上)	一冊
一、金光山志	一冊	一、河原田文庫目錄	一冊
一、石川県水産講話筆記(官職ノ撰)	一冊	一、神道祓式伝授	一冊
一、白湯山登山記	一冊	一、妙薬集	一冊
一、羽黒山月山湯殿山登山記	一冊	一、鰯帖	一冊
一、琉球産物誌(未刊行)	三冊	一、各地鰯帖	一冊
一、支那語自在(同上)	一冊	一、陸前陸中水産帖	一冊
一、動植鉦採集目錄	一冊	一、静岡県水産改良誌(官職中ノ撰)	二冊
一、岩手県水産標本採集目錄并解説	一冊	一、福島県水産講話筆記	一冊
一、普通植物書	二冊	一、鳥取県水産講話筆記(官職中ノ撰)	二冊
一、水産植物志(未刊行)	五冊	一、大阪府水産演説(同上)	一冊
一、水産小学	二冊	一、馬術伝書	一冊
一、島根県水産製造概説(官職中ノ撰)	一冊	一、幼年詠草集	一冊
一、河豚談(未刊行)	一冊	一、盛美歌集	一冊
一、北海漫遊記(同上)	一冊	一、岩手県巡回記(官職中ノ撰)	一冊
一、水産識名(同上)	一冊	一、明治二十一年九州沖繩八県共進会復命記	一冊
一、馬加紀行(同上)	一冊	(同上)	一冊

一、三面川鮭漁記

一、水産古事雜誌

一、岩手県金石共進会復命記(官職中ノ撰)

一、明治十八年九州沖繩八県共進会復命記

一、大麻改良法

一、青学の記

(5) 建議書(B-109)

今ヤ万国交際ノ日ニ當リ諸般文化ノ域ニ向フ、第一國
體ヲ確立シ富強ノ方法ヲ立ル事最モ枢要ナルベシ、富強
ノ道ハ全国ノ人民勉メテ百工物産ヲ富殖シ商權我ニ在テ
我國ノ財ヲ出サス、他國財ヲ入ル、ヲ以テ基本トナセ
リ、然ルニ物産ヲ殖シ商權商律ヲ立ルハ世人ノ常言スル
所ナレトモ多クハ有名無実ノ學者論ノミニシテ之ヲ實地
ニ施ス者ハ殆ント稀ナリ、今日ニ當リテ早く全国ノ人民
張胆明目各奮勵セスンハ海外各國ト並立事能ハサルノミ
ナラス遂ニ萬民生計ヲ失ヒ一己ノ身ヲモ保ツ事能ハサル
ニ至ルベシ、世間少年輩ノ如キモ纔ニ西洋ノ文字語音ナ
ト學ヒタルノミニテ已ニ文明ト自ラ安ンジ又國體制度ノ

一冊

一冊

一冊

一冊

(老カ)
一冊

老冊

如何ヲ問ハス叨ニ洋風ニ模倣シ開化ト自ラ誇ルハ却テ從
來ノ支那學天竺學ニモ劣レリ、或ハ華士卒農商ノ中頑固
ノ者ハ怠惰游食ニ流レ氣隨氣盡ノ權ヲ立世界ノ人情世態
ニ通セスシテ自ラ貧愚ニ陥リ甚シキハ 大政ヲ誹謗シ動
搖ヲ醸スニ至ル、実ニ嘆息スヘキ事ニアラスヤ、是日本
ノ通病ニシテ其病ヲ治スルハ即チ政府ノ政令教官ノ告諭
ニ非サレハ能ハス、譬ヘハ政府ハ父教官ハ母ニテ天下ノ
衆庶ハ子ナリ、父母タル者其職ヲ任シ子ヲシテ游惰病ニ
陥ラス各生活ノ目的ヲ立基業ヲ營ミ国内ノ物産ヲ富殖セ
シムルニアリ、要スルニ治病ノ方ヲ立スンハ遂ニ全國曖
昧模稜ニ陥リ開化トモ固陋トモ名号スヘカラサル國トナ
ルベシ、不堪杞憂ノ切聊述鄙見以テ識者ヲ待ノミ
壬申八月

河原田盛美識ス

(6) 国会開設建白書(B-109)

伏惟聖上沢及草木仁被率土盛大ノ美政アルハ何ツ贅言
ヲ俟ン、然レ共愚者亦一得ナシト云可ラス、請之ヲ論セ
ン、方今政體ノ失其議ス可キ者七ツ、其尤恐ルヘキ者二
ツ、先ツ其議ス可キ者ヲ挙ン、夫各國盟交ノ事ニ関リ全

權大使ヲ彼地ヘ發遣候ハ固ヨリ論ナシ、徒ニ開化進歩ヲ街フノ耳ニテ、賢愚論セズ學則ヲ発ナラシメズ官費ヲ以生徒ヲ外国ニ留学セシメハ国力漸々耗竭シ且其學ブ所内外ノ弁ヲ明ニセズ、遂ニ支フ可ラサルニ至リ家風其家財ヲ喰フノ勢アリ、其失一也、工部省ヲ置キ官自ラ下民ノナス可キ工業ヲ經營セハ尚利ヲ貪ルヲ本トシ官費勝テ計可ラス、元來官ハ下民ノ工業ヲ監督保護スルノ職ナリ、自其營業ヲ營ム者ニ非ス、古語ニ上下利以テ争フ時國アヤウシト、下民ヨリ納ル税ハ今日政府保護之恩ニ報スル者ナリ、依テ国家有益ノ土木有ル時ハ宜ク豪商豪農ニ命シ財本ヲ出サセ職者ニ付与シ其成業ヲ謀ル、若豪商ナシ(マ)時ハ官臨時之ヲ補助シ以テ財本ヲ下シ功竣ノ後年ヲ追テ財本ヲ官ニ納メシム可シ、其失二也、今茲癸酉墾地利博覽會ノ挙アルヤ、參議ノ大官其事件ヲ帶ヒ彼國ヘ發遣セラハ、ト聞ク、畢竟會ハ物産ノ美醜功拙ヲ比較シ利ヲ謀ルモノニテ舶齎ノ諸品ヲ護送スルハ海軍アリ、又法律ヲ司ルハ公使岡士ノ官ニ有ルベシ、内國事務宰相ノ大任本國國体立サル之今日、其本ヲ務ツシテ末ノ末タル博覽ヲ見

物シテ樂トスルハ、衆人はヲ何トカ言シ、且其利ヲ亨通スルハ豪商ノ業タルヘシ、其失三也、開拓使ハ北海道委任ノ官ナリ、然ルヲ東京ノ官庁ヲ誇大ニ營繕シ、殊ニ北地荒却ノ令ヲ下サル、此地ハ現今広漠無人荒蕪謂フ可ラス、猥ニ下民エ分賜セラル、トモ強テ企望スルモノ少カラシ、何ヲ以植民ノ方法ヲ立ルヤ、初メ僅一千万ノ定額ヲ以テ之ヲ開墾ス、其功未タ百分ノ一ナリ、民ノ欲セサル亦宜ナリ、須ラク判官ニ委任シ或ハ県令ヲ置キ全國ノ処置ヲ計ル可シ、其失四也、司法ハ府県ノ曲直ヲ糾彈スル省ニテ平常各県ニ配出スルモノニ非ス、然ルヲ獄訟有ンヲ欲スルヤ各県ヘ配出ス、令及ヒ參事等刑律租税ノ權ナクシテ何ヲ以テ各県ヲ鎮圧スルヤ、其失五也、文部教部ハ皇國ノ大道ヲ〇シ教化ヲ裨補スルノ職ナルベシ、然ルニ今日之生徒等ハ皇國ノ大道ヲ知ラズ共和政治ノ——沈醉シ何——教部三ス〇三条ノ令亦何ヲ以ホトコサン、其失六也、大藏卿ハ我國會計ノ長官ナリ、然ルヲ外國ニ在リ、何ヲ以テ職ヲ奉スルヤ、其失七也、此ソノ議ス可キ者ナリ、其尤恐ル可キモノハ國体ノ大道立サルト大藏ノ會計立タ

サルニ出ツ、国体ハ何ソ、皇統連綿ニシテ……今大藏省限アルノ歳入ヲ以テ各省各県限ナキノ歳出ニ応ス、苦心焦思正事ヲ得サルヨリ終ニ華士族ノ禄制ヲ廢スルノ策ニ至ル、然則爾來因循遊惰ノ士族何ヲ以テ生活セン、彼ノ金銀融通ノ法ヲ設ルヤ殆ト兵ヲ用ルニ同シ、兵ニ正アリ奇アリ、入ヲ量テ出ルニ応ス、是正也、定限ヲ踰ヘ冗費ヲ格外ニ生ル時ハ奇法ナクンハ有ヘカラス、今日廟堂ノ會計頗ル正ノ力ナク奇法ノ策ヲ失ス、故ニ臨時ノ冗費日々月々嵩ミ百万滯渋如何トモス可ラス、甚キハ在職ノ有司其責ヲ避ントシテ長官ニ譖説シ外省ヘ転任ス、故ニ事ハ旧ニ依テ凝結不解ノ患ヲ生シ會計ノ患何ノ年ニシテ漸減セン、禄制ヲ廢スル則ヘ數万ノ華士族疾痛慘胆苦情ヲ訴ニ堪ス、恐ク干戈ヲ動シ、郡県ノ制度何レノ日カ立ン、予メ其事ヲ計畫スル廟堂ノ成算ヲ察ス、其土崩瓦解ノ時ニ当ラハ速ニ鎮台幾万ノ兵隊ヲ發シ専ラ朝敵ノ罪名ヲ加ヘ之ヲ計減セント、勢然ル可キナレトモ、臣敢テ善トセス、今至愚極陋ノ小民 皇上深仁ノ有カタキヲ体セス、一政令出ル毎ニ偏ニ恩義ヲ後ニシ利ヲ專ニスル政ト思ヒ、

河原田盛美・史料ノート(鎌田)

官員撰挙ハ依怙ノ謗ヲ作シ封建ノ古ニ比スレハ疾首蹙額苦シムモノ甚多シ、輿論紛々悉ク政ヲ議ス、然ルニ討圧ヲ命スル所ノ兵士ハ亦禄制ニ拘ハル者ナルベシ、然ラハ纔ニ一県々ノ争亂紛擾ハ暫時鎮定ストモ各県響應シ所在蜂起セバ彼ノ兵士スラ豈倒戈ノ患ナシト云ン、此ヲ以熟慮スルニ速ニ国体ノ方ヲ設ケ且會計奇法ノ策ヲ設、然ル中ニ正法ヲ行ヒ毫モ民ニ信ヲ失ハサルヨフ被遊度*如何トナレバ各省各県協力同心セズ上下ハ和セズ、其国是ノ基礎ヲ立、各省各県国会上下之議事ハ院ヲ設ル時ハ司法

——□□——大藏——悉議シ以テアマネク天下大會議ヲ以テ*議會早ク此事ヲ議シ、各省各県有名無実ノ責ナク、各同心協力以テ皇国ヲ維持スルヨフ仰願フ所ナリ、臣恐懼屏營ノ至ニ堪ス、謹テ上言仕候

(明治六年)
二千五百三十三年
二月十三日

河原田盛美

議官

御中

註・本史料は草稿のため抹消・書入れ等が多くて判読に苦しむ部分が少なく

ないが、一応文意の通ずるようにしたものである。――問を補充。

(7) 琉球統治ニ関スル意見書 (A-1716)

第一章

（本史料、やや長文であるが、第一線官吏の現狀把握の實體と盛美の統治への態度・論理の展開を知りうるものとして掲げた。）

内務省出張所ニ於テ裁判上警察上兼務ノ件

此件琉球藩ニ於テ自今刑法司法省定律通遵奉施行候ニ付ニハ出張所ニ於テ必ス兼務セスンハ有ル可ラサルニ依ル事ハ曾テ松田大丞迄及開申置候通藩庁ニ於ル從來ノ刑法ナルモノハ中古明国ノ律ヲ模擬シ自国ノ略制ト近古旧幕府ノ時鹿兒島藩制ニ倣ヒ享保中三司宮具志頭親方ノ制定ニ依リ其後細少改正シ尚維新後新律綱領御渡ニ相成死刑以上ハ司法省ノ指令ヲ得テ而後ニ之レヲ所分ス可キノ令アリテ然而尚改正候旨藩ノ口述アレ共今藩地ニ在ツテ之レヲ探索察知スルニ全ク方今ノ刑法ハ有名無実ナルモノナリ其故ハ当今藩吏刑律ノ学ヲ学フモノ更ニナシ又刑法ノ官ヲ平等方ト云ヒ平等之側一名吟味役一名大屋子主取一名筆者三名見習等四名都合拾名ノ刑法官ナリト雖モ皆刑法ノ事ヲ熟知セルニハアラシテ奉行ハ必ス門閥ニ帰シ其他ハ僅々ノ読書及ヒ

習字ヲ試ミ諸官皆如此又勤功ニヨリ年輩ニ依リテ凡ソ何官ニ進転スル等ノ慣習ナリ故ニ多ク曖昧ニ属シ此職ニアリテ人ヲ罪科ニ所スルモ或ハ其親族ノ怨ヲ恐レ或ハ又士族ナレハ在官ニ怨ヲ受ストモ怨子孫ニ及ヒ顔情相熟シ互ニ怨敵トナル事ヲ怯ル、ノ風儀アリテ到底定律通り施行スル能サルナリ且爰ニ鹿兒島県下ヨリ来港ノ商人常四五十人或ハ百人内外アリ近來大ニ風儀善良ニ至リシ趣ナリト雖モ往々粗慕ノ輩アリテ疏人ノ恐ル、事猛虎ノ如シ又互ニ負債等ノ如キモ強ハ自ラ對シテ財産ヲモ奪ヒ弱及温和ノ良人ハ空シク損失スルモアリ又外ニ難事アリ一ハ土地ノ商人ハ皆婦人ナルカ故ニ内地商人等ニ至テモ皆娼婦ヲ置キ互ニ日々ノ商売ハ必ス婦人ノ業トナリ其婦人ナルモノハ貧窮ナルモノノミ多ク依テ商売買現金ノ取引ナク多ク貸売ニ属シ必ス遲滞ニ及フ多シ依テ直ニ本人ニ私對ヲナスハ土地ノ慣習ニヨルカ故ニ裁判上ヨリ論スレハ不条理ナルモノ多ク当藩ノ慣習ニ平民学校ニ入ルヲ免サス婦人ノ学問スルヲ嚴禁ス故ニ農民ニ至ツテハ一丁字ヲ知ラサルノ野民ノ

ミナルカ故ニ法律ノ如キ之レヲ布告スルモ全国法律ノ何物タルヲ知ルモノ更ニナカル可シ抑法律ノ學問ニ於テ容易ニ之レヲ學得可キノモノニ非ス歐洲文明諸國ト雖モ固専門ノ一科ト為シ其國人ニ在テモ此國ニ從事スル者數歳ノ力ヲ極メテ後其詳ナルヲ知ルト此藩官更ニ此ノ人民ヲシテ司法省ノ定律ヲ施行スル能サル事如ル可シ當時僅ニ兩名ノ藩吏律法取調ノ為メ上京セルモノ大略ヲ學得テ歸藩スルモ兩三年ノ後ニアル可キカ假令歸藩スルモ前述スル所ノ藩情風俗如何ニシテ全藩ニ及サンヤ方今英才人傑博識ノ諸賢日夜勉強能ク務メ勤ムルノ内地ニ有テスラ未タ法密ナラス民法治罪法等ノ成法編成ナラサルヲ況ヤ草昧未開ノ當藩ニ於テヲヤ然レ共罪惡ヲ懲スハ一世ノ公論無辜ノ冤ヲ保庇スルハ民主ノ大義治罪刑法法ノナキハ是國無キナリト假令此件ハ容易ノ事ニ非スト雖モ政府亦爰ニ着手セスシテ叶サルノ重件ナリ然レハ如何シテ好良ナル可キヤ遠海ノ小島方今内外多端ノ時ニ當リ政府亦爰ニ十分ヲ尽ス能サル可ク或ハ支那兩屬ノ慣習ヲ斷ツ漸ク今日ニアリ百事十

分ナラシムル時ハ一藩ノ人心ニカ、ワルノ恐レアリ若是等ノ事ヲ因^(マ)脩ナリトシテ十分ナラシムルニハ廢藩置縣ノ外ナカル可キナリ是大ニ緩急得失ヲ量知セサルノ愚策ナリ何トナレハ遠海ノ孤島政府ノ費何ヲ以テ之レヲ補ワンヤ甚不經濟ノ所置ヲ免レス条理ヲ以テ論スレハ証券印紙ナカル可ラス違式註違ナカル可ラス羅卒市在ニナカル可ラス訴訟法ナカル可ラスト一モ欠ク可ラサルノ件々挙テ算フ可ラサルニ至ル然レハ今爰ニ一ノ方法ヲ設ル事左ノ如シ

一藩庁ノ裁判官ト内務省出張所裁判兼官ト協議シ布告等兩庁ヲ以テス

一管内首里那霸及間切々々番所々々ニ揭示場ヲ設汎ク人民ニ示ス可シ

一來何年何月何日ヨリ成規之裁判ヲナシ既往ノ分ハ兩庁官員適宜処分致ス可キ事

一必ス一庁決ヲ以テス可ラス互ニ協議必ス兩庁ノ決議トス可キ事

右ノ通着手相成候時ハ敢テ藩權ヲ出張所ニ歸セシムル

ニアラスシテ漸次政令ノ一途ニ帰スルノ良策トセンカ
爰ニ一日囚獄場ニ至リテ實際目撃スル所ノ形状ヲ記ス
其地低湿其室垢汚暗淡トシテ光線ヲ引ス密閉トシテ新
風ヲ通セス実ニ囚人ハ飲食不良起臥意ニ戻リ動靜常ヲ
失ス此ニ於テ心志憂悶血液頹敗面色慘淡形容枯槁終ニ
鬼薄ニ入ラントス豈悲マサル可シヤ其レ獄ニ繫クハ惡
事ヲ軫シテ以テ後來ノ正道ヲ得シムルニアリスク衛生
ノ律ニ反シ壯者ヲシテ空シク暗中ニ怨死セシメントス
豈公法ノ正理トセンヤ是憂國者ノ常ニ歎惜スル所ニシ
テ本属政府ノ注意セスンハアル可ラサルモノナリ
右裁判上ト警察上トハ出張所官員ノ必ス兼務セスンハ
アル可ラサル事ハ客歲松田大丞伊地六等出仕迄左条ノ
通ニ開申シ及ヒ本年既ニ御着手相成候得共其前記載セ
シ儘ヲ記白シ以テ御参考ニ供ス

琉球藩在勤之義去明治五年封藩以来外務省之所轄ニシ
テ同省官員在勤罷在候得共公使領事ノ外国ニ在留致シ
候ニ類似シ来リ候処昨明治七年七月本省ノ管理トナリ
殊ニ今般清国關係断セラレ一般ニ明治年号及年中儀礼

御布告通遵奉刑法定律通施行ニ府県一致ノ政度ニ改正
ノ御趣意ニ付随而在勤官員奉務上之儀モ改正凡ノ目的
ヲ定メ職務之条令ヲ制定面目ヲ改メ不申候而者不相成
筋ニ有之候然ルニ不肖之盛美同藩在勤被申付去々月着
琉以来是迄在勤之官員ヘモ協議前後査考致候処条理ヲ
以テ論スレハ百事改正不致候而者不相成既ニ藩庁有テ
藩庁宜シク之レカ藩治ヲ布施スルアレハ此ノ出張置ニ
及ハサルノ道理ナレトモ清閑断止ノ条ヲ始今般御達ノ
条件ニ至ツテモ一ケ条モ感佩致サス一藩卒テ因循固陋
尚旧習ヲ墨守シ復古ノ念慮アルノミ廢藩ノ令アルノ日
ニ至ラスンハ出張所ヲ置サルヲ得ス出張所ヲ置ル、以
上ハ先ツ出張所ノ面目ヲ改メ一モ不条理ノ事ナク而シ
テ寬急ヲ酌量シ漸次方今之条理名分ノ有ル所ヲ一藩ニ
及サスンハ有ル可ラス然ルニ出張所從來之慣習等ハ是
迄追々御改正相成止ムヲ得サルニ出纔少ノ件々二三ケ
条ニ止レリ其内食品贈答ノ件ハ過日ノ御達ニ基キ一切
此弊ナキニ至リ其他一二ケ条ノ件々期ヲ見合在勤官員
談判一同熟議ノ上改正ノ筈ニ付テハ出張庁及官宅等之

藩費ニ出ツルノ一議ニ止レリ此一条御改正相成候得ハ
先ツ出張所ニ慣習等悉ク無キニ至リ可申ト存候方今ノ
世態名分条理ノ有ル所ヲ一藩ニ及ホシ漸次文明ノ域ニ
向ハシメ内地一般ノ御制度ニ適当スルノ道理ヲ了知セ
シムルノ件ニ至ツテハ容易ノ事ニ非スト存候得共出張
所職務權限條例処務ノ順序等御制定無之候而者差閤些
ラス何ヲ以テ權限トシ何ヲ以テ職務トスル等確乎明瞭
タル成規定例相立ス今般ノ御処分ニ基キ適當ノ御制定
被立度存候依テ實際上ニ當リ取調可相同存候処此職務
條例ニ至ツテハ速ニハ愚案相立兼候如何トナレハ藩治
ハ藩王ヘ御委任ニシテ藩々ハ有スル權大ニシテ出張所
ノ權内トスル事件無之若シ藩治上ニ於テ差置レ難キ事
アリ之レヲ本省ヘ伺越候ニハ時日遷延シ期会ヲ失スル
事アルモ措テ問フ能ハサルノ勢ヒ若シ問フ事アルモ彼
レニハ固疑ノ念深ク仮令正理ヲ談スルモ出張所ハ判任
ノミナリト蔑視スルノ心アリテ信用致サ、ルノ習風ア
リ細礼ニ区々トシテ表ニハ敬過ヲ以テ低身平頭シ其醜
態ニ至テハ慙察ス可ク其内実ニ於テハ狡点ニ練磨シ本

河原田盛美・史料ノート(鎌田)

省又ハ政府ヘ申立候件々ニ至ツテモ我ヨリ尋問サレハ
届出サル事多ク若シ外国船ノ稀ニ渡来スルアレハ在勤
官員ニ於テ応接スルノ權外務省ノ定規ニ依ル等ノ一ニ
止リ其他出張所ノ權件ハ無之内地人民トノ間ニ起ル金
銀貸借等其他裁判上ニ関スル事等内地人民ヨリ出張所
ニ願出レハ藩官吏ヘ申談シ藩ノ裁決ニ任せ来リ然ルニ
彼レノ裁判スル所曖昧模糊トシテ顛末整理ノアルナク
終ニ内地人民等ハ自身債主ヘ対シ暴挙強談其所有財產
家屋ヲモ押取候様ノ弊習尚今日至及シ甚不体裁ノ極ヲ
ナシ之レカ為メ藩庁ハ勿論出張所ノ權利無之狂暴ノ風
儀ヲ以テ官吏ヲモ蔑視並吞スルノ形勢ニ有之由実ニ不
安ノ事ト存候依テ尚實際篤ト取調職務定例及処務之順
序等愚案ヲ以可相同不取敢目下差閤之件々左之条件之
通相同候条何分之御指令有之様御取斗有之度候也

琉球藩在勤

明治八年九月十三日

内務中録河原田盛美

内務大丞松田道之殿

内務六等出仕伊地知貞馨殿

球藩庁ト内務省出張所トノ権件之事

当出張所ノ義外務省所管中ヨリ都テ外客ノ待過ニ類似シ候得共既ニ本省ノ管スル所トナリ其上清閑御廃止ノ上ハ従前ノ通ニテハ相成間シク尤封藩已来日未浅ク漸ク参事以下ノ官名ノミヲ今般御改正相成候位ノ事ニシテ藩治ハ百事藩王ヘ御委任ニテ都テ今日ノ御制度ニ適當致サスサリトテ名分条理ヲ以テ論決致カタク期ニ臨ミ時ニ応シ漸々ヲ以テ説論シ寛急ヲ見合懇話篤談常ニ本省ト藩庁トノ氣脈ヲ通セシメ度前条ニ申述候通当出張所ノ義ハ判任ノミニテ藩吏ノ蔑視スル所アルモ旧鹿兒島藩ヨリノ慣習ニヨリ旧幕吏ノ諸藩吏ニ對スルカ如ク圧制ヲ以テセシモノニヨルノ形チアリ是不条理ナルモノト云フ可シ然レトモ条理ヲ以テ論スレ彼藩王ハ一等官ニシテ是レ勅任也参事亦奏任也之ニ説論ト云ヒ指揮スルノ權ハ無之筈ナレトモ彼ハ藩ナリ是本省ノ出張所ナレハ御用筋ニヨリテハ参事トイヘトモ呼寄相違候半テハ正理ナリトモ服サ、ルノ風習アリ如何相心得可然哉其他藩庁ト出張所權限御確定ノ上御下命有之度

事

一藩下人民ト内地人民トノ間ニ起ル起判上ノ事

此件今般該藩ニ於テ刑法法定律通施行ノ御請ニ及候得共實際施行スル事難シ如何トナレハ頑固ノ疏官名分条理ニ暗ク判理スル能ハス前ニ陣述仕候通ノ情態ニ付内地人民ニ関ル裁判ハ出張所官員ヘ兼テ判事官ヲ兼サセラレ之ニ判理致サセ可然仍テハ在勤官員モ裁判上心得候モノ御増員有之度且捕亡吏ノ類附屬ノ官員五六名被差置度事

一警察官出張所官員ノ内兼任ノ事

此件前条ノ通裁判上ノ事モ有之ニ付内地人民ノ取締上ハ勿論鎮台兵營被置候ニ付而モ此官出張所ニ於テ兼務候様御決定有之度事

一当出張所地所並ニ建物ノ事

此件従前ヨリ大飯屋ト唱ヒ旧鹿兒島県在番奉行ノ居宅ニシテ去ル明治五年御直管封藩ノ際其儘外務省出張所トシ半ハ福岡九等出仕居宅トナシ其他圈内二ツノ官宅ハ是亦鹿兒島在番藩吏ノ居宅ニ有之候ヲ其儘在勤官吏

ノ官宅トシ外一ツノ官宅ハ去ル明治六年外務省ヨリ正院伺済ノ上取建ニ相成此費ハ政府ノ御入費ニ相立候得共其他ハ年中ノ修繕畳表替障子ノ張替ニ至ル迄悉皆藩費外ノ客ノ待遇ヲ免レス不条理ノ事ト存候間書面地所吏ニ内務省ノ官用地トシ都テ入費ハ本省ノ官費ニ致改度存候且ツ庁ト福岡九等出仕居所ト相混シ不都合ニモ有之上裁判上ノ事務取扱在勤官吏増員等ニ付テハ只今通ニテハ相成間シクト存候得共先ツ其等ノ儀ハ追テ可相伺藩費御取止ノ義ハ至急御決定有之度事

一 藩内巡回ノ旅費日当御確定有之度事

此件兼テ實際御見聞ノ義ニ付御見込ヲ以御決定有之度事

事

一 当藩士族非職ノ者出張所へ御雇トシテ出仕為致候事
從來当地在勤ノ官吏一名ニ付用頼ト唱ヒ非役ノ士族兩名宛其内福岡九等出仕へハ御飯屋守ト唱候モノ一名何レモ日々弁当持参ニテ相詰公私ノ用ヲ辨候慣習アリ是亦外各ノ待接ヲ免レス不条理ノ事ニ付速ニ相廃止可然ト存候然ルニ右ヲ廃止候ノミニテハ言語不通ハ勿論土

地形勢等ヲ相尋候ニモ差支候義モ有之且ツ彼ニハ全非役遊手ノ士族ニシテ内地ノ風儀事情ヲ見習ヒ言語等モ覚知スル為メニ數百人ノ内ヨリ争ヒ望ミヲ申出右等ノ勤功ニヨリ相当ノ役義ヲモ勤サセ候ト申事ニ付実ハ開化ニ導クノ一端ニモ相成候義ニ付更ニ出張所へ御雇トシテ出頭申付多少ノ月給ヲモ被下候ハ、可然ト存候事

一地誌並ニ国誌編輯ニ付取調ノ事

昨明治七年五十六号公布同百四十七号公布使府県地誌編輯国誌編輯ニ付取調ノ例ニ倣ヒ出張所ニ於テ藩吏ト協議取調可然ト存候独リ一藩ノミ此輯ニ洩ル、ハ後世ノ疑所トナリ不条理ノ事ト存候事

一 藩地へ電信架設ノ事

南海ノ要地隔絶遠海ノ場処鎮台兵營ヲモ被置候ニ付テハ速ニ此設ナクンハ有ル可ラスト存候漸次御設置相成義トハ存候得共存付ノ儘相伺候也

一 出張所定備金及定費之飯額ヲ定メ出納ノ規則ヲ立ル事
此件外務省中三千円御用金トシテ持越相成遺払残金引渡ニ相成居候処右ハ兼テ何々ノ件ニ付テハ払出シ出張

所限リ取計何々ノ件ハ伺ノ上等成規被立置度且ツ定備
定費等ノ額及都テ出納ノ規則御下命承リ置申度事

右出張所改正ノ件々ハ夫々御着手相成自後一般ノ景況ハ
木梨少丞ノ具状ニアルモノナルヲ以テ之レヲ略ス前件々
ヲ爰ニ記載セルモノハ余等ノ在勤中出張所ノ景況ヲ顯然
明知セシメンカ為メナリ今般御着手ノ内実効ヲ奏ス可ク
一藩内人民ノ為ニ驗シキ幸福ヲ得セシメント保証スルモ
ノハ警察官ニアルナリ

(8)寛政九年十二月宮沢村当已御取箇米永中勘定目録(半

一冊)(B-14)

覚

宮沢村

一米三斗六升三合	本途
一永貳拾四貫六百七拾八文貳分	本途
一同七百八文壹分	口永
一同五百八拾貳文	畑方年賦
一同六百九拾文	子社倉年賦

一同四百六拾文
一同四百六拾文
一同百貳拾五文
一同五百七拾五文
一同六百九拾文

丑同断
寅同断
古未進
卯社倉年賦
辰同断

納合 米三斗六升三合

永貳拾八貫九百六拾八文三分

内

永八貫三百七拾五文
同八貫三百七拾二文
同壹貫五百文
小ノ拾八貫貳百五拾文
残永拾貫七百拾八文三分

九月納
十月納
御手当金

(後文略)

名主

寛政九年巳十二月
御代官様

弥惣治

(9) 蓼沼川岸問屋請書(半一冊)(B-27)

十五ヶ年季差入申議定証文之事

一私儀先年ヨリ三本木河岸ニ罷有御荷物請払渡世仕来リ候所、今般蓼沼川岸引請同所江引移リ同株船積問屋仕来リニ付弥堅儀定仕御荷物御廻送^(運カ)向被仰付候様奉願上候間、不相替御荷物沢山御廻送被仰付可被下候様偏ニ奉願上候儀定書左之通リ

(派野印)

(同上)

印鑑



〇

一御公儀様御法度之儀堅相守御法度之荷物請払不仕候事
一元来会津御蔵入御荷物之儀者高金之品物故、古船等江積入候儀者不仕大切ニ致し大丈夫ニ取計ヘ可申候、万々一請払中ニ荷物紛失者不及申拔荷濡沢手等出来候節者其時之相場ヲ以急度弁金可仕候事

一田植時稻かり麦まき時ニ至リ農業繁多之時節多ク共馬付差支不相成様馬士仲間世話人相立急度取極置候事

一麻煙草紫蘇其外

本荷屯駄ニ付

宇都宮ヨリ蓼沼川岸迄

立馬駄ちん貳百七拾六文ツヽ

行かへり馬ニ而引取候節者少々ツ、直下ケ可仕候事

蓼沼^ム運ちん藏敷共本荷屯駄ニ付
久保田迄

銀屯匁六分

但し木の崎揚ケ江戸迄大廻しニ相成候御荷物之儀者其時之荷込或ハ干水之節者運ちん高下有之候間其時久保田辺弁金を以積方可仕候、聊たり共高直ニ請取中間敷候、元来江戸廻リ船所持能有候間御勝手次第積方可仕候事

一久保田揚ケ木の崎揚ケ江戸近迄大廻し共御勝手次第取計ヘ可申候間御元^ム才料様方江御談之上御遣し可被下候

一右議定之儀者当戊辰^ム来ル子年まで十五ヶ年季相定申候年季明キ候ハ、又々証文書替致し前書之通り取極メ御運送向幾久敷御願申上度奉存候間其段御承知置被下

度偏ニ奉願上候

右之条々弥堅相守御荷物御運送向実意第一ニ取計ヘ可申候、万々一間屋方ニ而右議定ニ相違仕候儀出来候節者請人方ニテ引請早速埒明荷主様方江毛等御損失相懸ケ申間敷候、為後日年季付議定証文差入置申所仍而如件

嘉永三庚戌年

十一月

野州河内郡

蓼沼川岸

問屋

浜野吉右衛門①

請人親類

名主

浜野弥左衛門②

会津御蔵入宮沢

河原田弥七殿

(10) 三猿雜記(B-64)

一四二

A.

一辰四月廿一日七つ時、横浜の政治帰候、但今日山王泊リニ而参候所当月十五日横浜出し候書狀

私義当月七日、大間々宿ニ着、三日逗留、藤生島屋へ相尋申候所、今以打ころし一件片付不申候処、猶又十日之夕も足利近在ニも有之、何分不穩次第、殊ニ、関東ハ皆々官軍ニ降参、御家のミニ相成、会津庄内桑名杯名乗通行六ヶ敷、板橋辺ニ而会津人被押候由、高輪辺ニ而も同断、何れ今程ハ子細無之、町人故被免候よし、多七義、永田長五郎殿八町源藏殿角三郎殿一同横浜へ生糸積出向候跡ニ而、段々跡追ニ相成、十三日横浜弁天通二丁目上野屋金七ト申方迄参リ申候、浜地も少々下ケめ追々下落、何分結もの向不申、下もの等直し、売向^③義候所、上物も六百十枚外参不申、然ル所、当十四日、イキリス七十三番ニ而私モ参候所、下品六百枚ニ而少々売込候へとも、上品も結ニ而者多分之違ニ付、結び直し、島田相合候^④取懸リ、三日計リ

ニ出来候□、左候へは相応之売込と相成申候、尤異人も阿四五日中ニ出帆之よしも相聞、

(中略) (此間、戦況ヲ報ズ)

一 此節異人参内銘々様相成申候、

当地も、町外ハ官軍出張、御奉行も一万石計リ之人被参候へ共、異人取合よろしからず候ニ付、又々横浜ハ役人ニ相成申候

一、銭十貫六百文 一生糸上三百兩ガ下貳百兩位

一、米貳斗五六升、老斗も引上申候

辰四月十五日出

横浜ガ 悴

B. 尚々、浜牢舎之ものハ、外国人ガ歎願ニ而、御赦免

ニ相成候而、中奥商人帰候ものも有之、右之衆ニ逢、

承申候、其余無別条なし、

飛脚を以啓上仕候、下拙共十六日□其後十七日認メ書状七月廿九日帰宅拜見仕候、

一中奥八丁ノめ宿、升屋銀五兵衛宅へ、善兵衛サマ残り、下拙者七月廿六日出立ニ而、郡山出、漸以七月廿

河原田盛美・史料ノート (鎌田)

九日夕、寢元着仕候、奥西ひき糸も、六月下旬ガ七月五日迄者更ニ望人なし、浜付ニ而百拾五兩ガ百廿五兩迄、針道老品百五十兩位の取引有之、少ニ候ハ、買入いたし事ニ相成候、一時ニ引上ケ七八日頃ガ十一迄、浜付百五十兩針道貳百五十兩余の買入相成候や□□細絹も大下落、老分ニ織絹ニ而目方十八九匁割ニ相成候由、三分も一時ニ引上ケ、九匁二三分取引相成候、下拙共ハ十八日郡山着夫ガ本宮へ出少々計取引仕候、結び糸ニ而百八十五兩斗、八丁め在飯野も糸ハ本宮ガハ余程上品、右ニ而も百八十兩前後ニ而、少々計買入いたし、右見本□荷として七貫貳百匁、外ニ附合を以御下金受取参候処、定而御聞取及も可有之候、過日中奥本宮ガ始リ、廿八日ニ二本松公乍恐落城ニ相成候時ニ而、当分御下金も六ッ敷相成候、昨日、河原様買入方義、善兵衛サマ老人中奥へ残置候次第もよく、掛リ御役所サマへも申上候、何れ六ッ敷様子ニ御座候、

一□□八郎次様へ、十九日認メ申上候処、百兩□田屋

留四郎殿へ差置候御案内申上候、何れ行違御座候哉、其儘ニ為差置候、

一越後行、いかか哉、御案事申上候、七月廿二日、浜生清藏と新瀉ニ而別れ、右之せつハ大下落いたし、光金ニ^(カ)て六ツ敷様、善助殿^(カ)承候も様下拙へ其通り差置候、人□□□ハ廿四日預^(カ)新瀉着と奉存候、何れニ預御手配被成下候へ共□□有之イタリヤ異舟七月七日横浜へ帰舟いたし候様中奥ニ而も種紙持遣シ候もの帰宅之上承申候、是いかゞニ有之哉

一、長作殿持種紙之六月廿九日無事江戸表へ着、七月一日休みいたし二日御改メ受三日夕方舟て横浜表相出居加奈川宿へ参候処江戸^(カ)飛脚ヲ以御達し相成候、尤種一同ニ奥州種商人□織取押ひ御吟味之上牢舎被仰付候次第ニ御座候、右へ飛脚ヲ以其場逃れ申し候、此段御一統御安心可被下候、江戸表七月五日出立候もの十四日^(カ)郡山ニ着、長作殿伊助殿^(カ)文通なし、其後十四日江戸出立、廿一日夕郡山着候てもものニも文通なし、尤与市殿者相州へ参候様子ニ承り、定而兩人ハ浜表ニ而治木

安兵衛殿へ入荷、大長殿入荷いたし候而文通なしニ奉存候、種紙も上州信州沢山出、一旦者下荷いたし候而も中奥之品六月廿四日棚倉戦争後更ニ出荷なし、品々不足ニ申故引上ケ可申見込テ申居候次第ニ御座候、

一、善兵衛サマも八丁め□□ニ罷在候而も其せつ柄式本松様落城之咄ニ御座候へハ定而福嶋へ出、中荒井金吾サマ角三郎殿源藏殿橋本林介殿逢荷物持参米沢へ趣候半愚存仕候、寔元ニ^(カ)飛脚^(カ)いかゞ□□差^(カ)不仕候、罷在候

一昨日□□兵衛様ニ逢浜かり右之次第ニ御□仕候手代り長作殿ハ多七サマ御頼而ヌがら代金□□手元^(カ)持参此方^(カ)引取御出被下候様申候、追而同論浜行も大いニ手間取り相成候間^(カ)是以御心配被成下候よろし、九日越後行共当惑仕候次第ニ御座候間何れ御出向キ御取調被成下候へハ前以多七サマ申上度此段ハ数衛様へモ申上候へ共多七サマ書状御遣し早速ニ御出向キ被下候様御頼申上候

二シヤクモスネル兩人とも越後行、主人ハ浜付へ下る様

御寄参候様御役承り申上候へ共此節柄少々之内キ糸買

する。

入方も扣ひ候様河原様を被仰聞候、地方御手配も夫れ
夫れ御配置申候、下拙ハ善兵衛殿御住居相分ル迄若松

へ滞留りたし、其内定四郎サマ御帰宅、可申上候

(中略)
八月三日朝

御皆様へ右次第御願申上候

〔付記〕 本稿は、昭和四五年度文部省科学研究費（一般
研究）による「戊辰内乱期の研究——東北戦争の分析を
中心に——」の研究成果の一部である。

現地調査にさいしては、盛美の後裔に当られる、河
原田盛雄氏のご子息隆磨氏がご所蔵史料の閲覧をご快
諾下さったし、関係史料の調査閲覧については、伊南
村村長・助役・教育長はじめ各位から全面的なご協力
を賜わった。また現地調査の実現に斡旋の労をとられ
た会津若松市の山口孝平氏のご配慮があったことも明
記しておきたい。さらに、史料館所蔵史料の検討に当
っては、原島陽一研究員のご指導を得た。末尾なが
ら、誌上を借りて、これらの方がたに深甚の謝意を表